

法然上人『伝法絵流通』と関東

——仏法王法の興隆と法然の念仏——

今 堀 太 逸

はじめに

さきに『法然上人行状絵図』における法然の遊女教化譚の成立過程を論じた。室津の遊女が罪業深いわが身をなげき、法然の教化により念仏往生をとげる話である。中世前期、法然の生きた時代には遊女は賤視の対象ではなかったとの事実を前提にして、遊女教化譚の形成されていく過程を伝記絵巻諸本と説話集等を検証することで探ったものである。また、平成三年の佛教大学四条センター主催の浄土宗講座「法然上人のご遺跡」において、法然上人二十五霊場第二十一番札所勝林院を担当した。天台声明の根本道場である大原の勝林院が法然の遺跡とされる経緯について、「勝林院と大原問答」と題して伝記史料における大原談義の記事を紹介した。

この遊女教化と大原談義の二つの話は、法然やその弟子親鸞の門流の絵解きや唱導、明治以後の浄土宗における布教伝道活動の展開のなかでも、法然の生涯における著名な出来事としてつねに紹介されてきている。そのときに参考とされるのが、浄土宗総本山知恩院所蔵『法然上人行状絵図』四十八巻である。昨年には大橋俊雄氏により上段に原文、下段に現代語訳をした『法然上人伝』（春秋社）上下二巻として刊行された。各社が出版する絵巻全集に収録され、

博物館における高僧絵巻の特別展示やその図録解説において、美術史上も特筆すべきものと高く評価されているので、法然上人伝の決定版となっている。よってその内容についても、あたかも歴史的事実のようにとりあつかわれている。

しかし、法然の遊女教化や大原談義の話が最初に登場する伝記絵巻は、福岡県久留米市善導寺所蔵の嘉禎三年（一二三七）に就空が執筆した旨の記載がある『伝法絵流通』（『本朝祖師伝記絵詞』）である。明治四十五年三月の宗祖大師七百年御忌奉修を記念して、善導寺より望月信亨氏校訂により『本朝祖師伝記絵詞』と題して刊行されているように、『伝法絵流通』が注目されてこなかったわけではない。望月氏はその序において「捧読するに、詞書、画図、共に頗る典雅素朴にして、一見、上人伝中の白眉たるを覚えき」と、手にしたときの興奮を記している。浄土宗の大本山に所蔵されていることもあり、浄土宗史における法然の生涯や遺文、教団史研究においてはさかんに活用されてきている。

『伝法絵流通』をとりあげた主要な伝記研究としては、中沢見明氏『真宗源流史論』（法蔵館、一九五一年）、井川定慶氏『法然上人絵伝の研究』（法然上人伝全集刊行会、一九六一年）、三田全信氏『成立史的法然上人諸伝の研究』（平楽寺書店、一九六一年）、田村円澄氏『法然上人伝の研究』（法蔵館、一九七二年）、伊藤唯真氏『浄土宗の成立と展開』（吉川弘文館、一九八一年）があり、最近の研究成果としては、中野正明氏『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館、一九九四年）と中井真孝氏『法然伝と浄土宗史の研究』（思文閣出版、一九九四年）をあげることができる。

ところで、わたしの伝記研究は、その生涯や思想と照らし合せてみて歴史の事実を究明することよりも、伝記作者の頭の中で再構成された法然の生涯と教えを事実として読み、紹介することを第一の目的としたものである。そしてあわよくば、そのような念仏を受容した念仏信仰者の信心の中味を窺い知ること、中世の在家生活者のなかに定着している「法然の念仏」を明らかにすることをめざしたものである。いわば日常生活次元からの「法然の生涯と教え」へのアプローチである。遊女教化や大原談義をとりあげたのも、法然の門下においてその生涯と念仏がどのようなものと理解されていたのかを明らかにすることで、法然を祖師と仰ぐ念仏集団や教団の特色、社会への対応を解明

するための一環としてであった。

本稿では、上述した二つの出来事が最初に登場する『伝法絵流通』において、伝記作者（耽空）が法然の生涯と念仏を、また人びとが法然の念仏を信心することによる利益をどのようなものと説明しているのか、またその説明の背景にある思惑についても検討をくわえてみることにしたい。

一 『伝法絵流通』の成立と鎌倉

（一）『伝法絵流通』と絵解き

耽空執筆『伝法絵流通』は、いく枚かの紙を横に継ぎあわせ、そのはじめに表紙をつけ、最後にまるい軸をつけて巻いたものという点からすれば、絵巻形式の伝記である。

絵巻における文章と絵画との通常の基本的な関係は、先に詞書が書かれ、つぎにこれに対応する絵画が描かれている。この詞書と絵画との交互形式がくり返されながら物語が展開していくのである。絵画は詞書の造形的説明をし、詞書は絵画の補足的役割をするのであり、両者のあいだには不可分の、密接な関係がある。したがって詞書の数（段数）と絵画の数（段数）とが同じ数であることが原則である。両者の数が同じでないものは、厳密に言えば完本ではないとの指摘があるくらいである。²⁾

耽空執筆『伝法絵流通』では、そのような絵巻の基本形式はまったく無視されている。特色をあげてみる。³⁾

○絵画の upper 段や下段に詞書がある。○文章（詞書）だけで説明する段がある。○絵画だけの段がある。○絵画のなかに絵画を説明するための文（書入れ）や経典からの引文がある。○絵画の場面が連続している段がある。○絵画を豎幅絵伝のように上中下、三段程度に描いている。

といったことである。したがって、耽空執筆『伝法絵流通』は、奥平秀雄氏が、絵巻の画面がわれわれに話しかけ、

語りかける声によって、あるときは速く、ある時はゆるやかに、絵巻物をひらき、巻き、動かしながら、絵画と自分の呼吸をあわせていく。ここに絵巻物独特の、作品と鑑賞者とを結ぶ一種の親近性が生まれてくる。画の中の人生や自然に鑑賞者が足をふみ入れ、作品と人間とが一種の交渉を持つといった例は、絵巻物の世界ではしばしば経験するところである。というように、解説されるようないわゆる鑑賞的絵巻ではないことは明白である。ようするに『伝法絵流通』は個人が手に取り、詞書を読みながら絵画を鑑賞することで、法然の生涯と念仏を学ぶために制作されたものではないのである。

それでは、どのような目的のために制作されたものであるのか。

書名の『伝法絵流通』の「流通」には、教えを伝えひろめるという意味があるように、法然の教えをひろめるため、すなわち「絵解き」をするために制作されたものである。巻二の奥書（上巻識語）に、この絵画を披見し、その詞を説くものは弥陀三尊を礼拝し、大経（『無量寿経』）の文を読むべしと耽空が記しているのは、法然の生涯と念仏の教えを絵解きするために、絵巻形式の伝記を制作したものであることを物語っている（後述）。

絵画のなかに書込まれた詞が「絵解き」の便宜のためである『伝法絵流通』に先行する絵巻には、新羅国の華嚴宗の祖師である義湘と元曉の行状を描いた『華嚴宗祖師絵伝』がある。承久の乱のちに高山寺に帰依した貴族や信者のために作られたもので、その成立は明恵の在世（一一七三―一二三二）の時代である。また永仁四年（一二九六）に制作された『天狗草紙』は絵画の中の書入れにより物語りが展開する絵巻である。

ところで「絵解き」とは、法を説くものがその所説をあらわした絵画を見せながら、それを解説し、耳と目によって、これに導き入れようとする方式のことである。観衆は解説者の話を聞きながら、絵巻や掛幅仕立ての絵伝を眺めながら、その説明を耳で聞くのである。絵画をにかけてこれを説くことで、言葉によって口から耳に伝えるばかりでなく絵画によって視覚にうったえるという視聴覚伝道である。「伝道」としての絵解きこそ中世仏教の民衆化・大

衆化のうゑに重要な方法であつたのである。⁷⁾ 絵解き研究については、昭和五十六年に絵解き研究会が発足し、会誌『絵解き研究』が刊行されたこともあり、近年研究が充実してきた分野である。⁸⁾

耽空執筆『伝法絵流通』の美術史・絵解き研究の立場からの研究は、梅津次郎氏により「法然上人伝法絵 下」の内題を持ち、その内容が耽空筆『伝法絵流通』の第三・四巻にわたる鎌倉後期の伝記絵巻が『国華』(七〇五号)誌上に紹介され、宮崎円遵氏が『伝法絵流通』の絵解きと談義本としての特色を指摘してから進展した。⁹⁾『国華本』は親鸞の門流で使用されていたものであり、高田専修寺には詞書だけの『法然上人伝法絵 下巻』が伝来するように、『伝法絵流通』は親鸞の門流に影響をあたえ、展開した法然の絵巻なのである。¹⁰⁾ 小山正文氏は初期真宗における『伝法絵流通』の影響をうけた掛幅の絵伝を精力的に調査され数多く報告されている。¹¹⁾

ところで、絵巻には演出がなされている。その代表的な演出方法に「反復描写」と「吹拔屋台」がある。「反復描写」とは、主人公や主要人物を紹介し、その行動を説明するために、物語の展開のなかでくり返し登場させる描き方である。「吹拔屋台」は絵巻物特有の構図法で人物紹介法の一つであるが、建築物の屋根や天井をとり去り、斜め上から室内を見おろしてのぞく描法である。この両方とも耽空執筆『伝法絵流通』においても活用されている。

「反復描写」の一例を「慈覚大師」とれば、

(巻二) 慈覚大師が清和天皇に授けた戒を、法然が高倉天皇に授けた。

(巻三) 聖覚が勝尾寺における唱導において、慈覚大師の念仏と法然の念仏を讃嘆した。

(巻四) 法然は慈覚大師の袈裟を着して念仏往生をとげた。

(巻四) 慈覚大師の念仏を守護した赤山明神は、法然の念仏を守護する。

(巻四) 伝記のまとめとして耽空が、法然は慈覚大師の遺風、戒文についた袈裟を相伝したことを強調。

といった具合にである。伝記作者耽空が法然の戒律と念仏を、慈覚大師の戒律と念仏の相承、展開として説明してい

ることがよく理解できる。

(二) 鎌倉の念仏と大仏

納富常天氏は金沢文庫から発見された『伝法絵略記抄』断簡一紙の全文を『伝法絵流通』と比較対称しながら紹介されている。本紙は『末法灯明記』『大唐西域記』の抄出一紙とともに合綴されていて、合綴の二書の抄出が延応元年（一二三九）であるので、『伝法絵略記抄』もそのころ書かれた可能性がある。それが事実とすると耽空執筆の嘉禎三年よりわずか二年後である。納富氏が強調されているように、『伝法絵流通』が転写のさいに刪補されていることより、嘉禎の原本を探る手がかりになる貴重な断簡一紙であるといえよう。¹³

さて、鎌倉における法然の念仏は、菊地勇次郎氏が指摘されたように、静岡県熱海市の走湯山（伊豆山）を中心にしてひろまったようである。¹⁴

走湯山権現は源頼朝や政子の崇敬が厚く、箱根権現とともに毎年の参詣は二所詣でとよばれていた。『吾妻鏡』によれば、頼朝は治承四年（一一八〇）の挙兵決行にさいして、七月五日に走湯山の文陽房覚淵を北条時政亭に招き、『法華経』読誦の功を終えての素願を仏陀に啓白している。覚淵は、八幡大菩薩の氏人・法華八軸の持者である頼朝であるからこそ、素願成就が可能なのであり、それは『法華経』八百部読誦の加被にほかならないと表白を唱えている。頼朝はまた、八月十八日には年来の日常勤行の代行を政子の経師であった伊豆山（走湯山）の尼法音に依頼している。そのなかには阿弥陀仏名千百遍が含まれていて、頼朝が父祖の頓証菩提のため毎日念仏を唱えていたことがわかる。翌十九日には走湯山の衆徒が往還の狼籍を訴えた。それになんとして頼朝は、世上無為に属せば伊豆・相模の地一所を莊園として寄進するので、関東において権現の御威光を輝かすようにとの直筆の御書を遣わしている。また、この日の晩より政子は覚淵の坊に身を寄せている。この走湯山の東谷には、平安初期に安然系の天台宗が入り、常行

堂に象徴される天台系の浄土教がひろまっていた。菊地氏は法然の教義が天台宗の教線にのり、走湯山への崇敬に裏付けされながら、武家社会にひろまっていたことを検証されたのである。¹⁶

源氏の氏神である鶴岡八幡宮は、関東の安穩と万民の豊樂を祈り、天変地異や諸難を防ぐための祈禱や法会の中でもあった。¹⁶ その運営は別当や供僧によりなされていたが、別当は園城寺（寺門派）と東寺出身の僧が独占し、供僧は寺門・山門・東寺の割合がほぼ三・一・一であったといわれている。¹⁷ 承久の乱のさい後鳥羽上皇打倒のため幕府軍が上洛した翌日である承久三年五月二十六日には、関東で初めての「大仁王会」が修されている。¹⁸ 鶴岡八幡宮は関東における最高の仏法場であったのであるが、延暦寺（山門）の法系の僧はまれであったのである。

ところで、『吾妻鏡』暦仁元年（一二三八）三月二十三日条には、大仏堂事始めの記事があり、浄光が尊卑縉素を勧進してこの営作を企てたとある。寛元元年（一二四三）六月十六日には、完成した八丈余の木造阿弥陀仏像の供養が行なわれている。このときの導師は元山門僧で勝長寿院別当の良信である。

高橋秀榮氏は金沢文庫保管の『大仏旨趣』を鎌倉大仏における新出史料として紹介された。¹⁹ 本書は表白、説草の手控えといった類のもので、鎌倉後期に書写された称名寺の伝承本である。内容は、大仏の造立を発願した人物は「勧進聖人」「願主聖人」「聖人」などと呼ばれる僧で、浄土教の教説をうけた念仏僧であること、大仏は東関の境に造立されたが、造立の資金は一草一銭の勧進によって調達されたものであり、大仏の造立は八幡宮の夢告によるもので、八丈の阿弥陀仏であるというものである。高橋氏は『大仏旨趣』の成立について、『吾妻鏡』「一条家本古今集秘抄裏文書」「東関紀行」を参照していない。参照していたならば、勧進僧の名前を「浄光」ないし「定光」と記し、造立地の地名を「相模国深沢の里」とか「由井の浦」と記しえたはずである。それらが具体的に書込まれていないのは、これらの書物を直接見聞することなく筆を走らせたためだと推測されている。

この『大仏旨趣』を引用しながら、鎌倉大仏建立の歴史的意義を明らかにしたのが上横手雅敬氏の論文「鎌倉大仏

の造立」である。寛元の開眼供養の前日は北条泰時の一周忌にあたることより、泰時追福の意味があったとされる。⁽²⁰⁾

大仏は延応の頃より「関東のたかきいやしきを勧めて」造立されたのであるが（『東関紀行』⁽²¹⁾）、その勧進活動には鎌倉幕府も協力している。新大仏上人浄光が北陸・西国に人別一文を差出すように幕府に下知してほしい旨を要請している延応元年九月の「新大仏勧進上人浄光申状」（『一条家本古今集秘抄裏文書』）には、「祈るところは東土利益の本尊なり、念ずるところは西方極樂の教主なり」とみえ、「（八幡）大菩薩の冥助を仰ぐ」と述べている。⁽²²⁾

『大仏旨趣』によれば、願主聖人がこのほど大伽藍を建立しようと思ひ立った最初の心は、八幡の社壇において五更の曉に一の靈夢を感じて、この大願を始めて思ひ立ったのである。八幡大菩薩は阿弥陀の三尊である。ゆえに阿弥陀仏の勧めによって阿弥陀仏を造るのである。また、仏法は王法により、王法は仏法によることなれば、奇特の靈地も都の辺りに多くある。それなのに八幡大菩薩が、大仏をこの国（東国・坂東）に建立されようとしたのは、この所が阿弥陀仏の利生のところだと思われてのことだという。今聖人は八幡大菩薩の夢告に任せて、八丈の阿弥陀仏像を東関の境に安置することにしたことを明らかにしている。

このようにして八幡信仰と阿弥陀信仰とによる仏法王法興隆の象徴として、関東においては阿弥陀大仏が建立されたのである。その勧進を担当したのが念仏僧浄光であった。

『伝法絵流通』は、執筆者耽空が法然の門弟として実在したかよくわからないため、別人が「耽空」に仮託して創作したものとの指摘がある。したがって伝記の内容も創作されたものではないかと疑われている⁽²³⁾。ただし、上述したような鎌倉における宗教的な環境のなかで、耽空の執筆として制作され、法然の念仏を布教するために活用されていたことは確かな事実である。康元元年（一二五六）に親鸞が書写した『西方指南抄』に収められている『源空聖人私日記』の末に、

何況末代惡世之衆生、依弥陀称名之一行、悉逐往生素懷、源空聖人伝説興行故也、仍為来之弘通勸之、

とみえ、「源空聖人の伝説興行の故なり」と述べているのは、法然伝の絵解きのことを記載したものと考えられる。⁽²⁴⁾ 中井氏が指摘されたように、『源空聖人私日記』が『伝法絵流通』に遅れて成立したものとすれば、この記載からも「伝法絵」系統の法然の伝記が東国において布教手段として相当の効果をあげていたことがうかがえる。

よって次章以下では、上記諸氏の研究成果をふまえて、善導寺所蔵の『伝法絵流通』（以下『善導寺本』と略称）が関東における仏法王法の興隆との関係で、法然の念仏をどのように説明しているのか、すなわち関東における「法然の念仏」流通のための課題と問題点を中心に考察してみることにする。

二 『伝法絵流通』上巻

① 上巻序文

(一) 『善導寺本』巻一

法然の最初の絵巻である「伝法絵」系統の序文（『善導寺本』『弘願本』『琳阿本』）は、「蓋し以^{けだ}みるに、三世に多の佛出給て若干の衆生をすくひまします」と、およそ過去・現在・未来という三世に多くの仏が現われ、それほど多くはないが人びとを救っておられる、ということを描べることから始まる。そして、インド・中国・日本という三国における国王による仏法興隆の「はじまり」を明らかにしている。

すなわち、インドにおいては、浄飯王の后が白馬に乗った金色の天子が右脇に入る夢を見て釈迦が誕生した。これは中国では周の昭王の時代にあたり、日本では神武天皇の父である彦波瀲武鸕（鵜）草葺不合尊の八十三万四千三十六年に相当する。中国では後漢の明帝の永平七年（六四）に白檀の仏像が迎えられ、同十年に白馬寺が建立されたこと。日本では、それから四百八十年余り過ぎた欽明天王（皇）の御時、厩戸王子壬申十月に百済国聖明王より釈迦金銅像と経巻が送られ、四天王寺が建立され「それより以降、聖武天王、東大寺ヲ鑄造して仏法興隆、粗如来在世にこ

とならずして、ややひさしくなりにける」と述べて、聖武天皇（皇）が東大寺大仏を鑄造して仏法を興隆されたといひ、日本においても仏法の興隆はほとんど如来（釈尊）の在世のときと異ならないものとなったのである。

「伝法絵」系統の詞書においては、日本・日本国・我朝・本朝という言葉が頻出し、天皇を日本国の王、すなわち国王とみなし、「皇」を「王」の文字でしばしば表現している。²⁶日本における仏法に関する出来事をたえずインド・中国における先例とくらべて叙述するとともに、聖徳太子と東大寺大仏を日本における仏法興隆の象徴としている。「善導寺本」と『弘願本』の序文は、上述東大寺大仏鑄造を記したあと、「いま先師上人念仏すゝめ給える由来を、画図にしるす事しかり」と述べて結ばれている。

『善導寺本』の序文では、そのあと「于時嘉禎三年丁酉正月廿五日、沙門耽空記之」とみえるように、法然の生涯と念仏教化についての絵巻を展開するのに先立って、あらかじめ、嘉禎三年（一二三七）の法然の命日に弟子の耽空が記したものであることが、これから絵巻を聴聞する人たちに知らされている。

② 法然の誕生

『善導寺本』巻一は上述した序文のあと、法然の誕生から修学、大原で諸宗の碩学へ念仏を勧めるまでを叙述している。絵画は第一「法然誕生の図」にはじまり、第二十二「大原談義の図」（現状では巻四末）で終わる。

法然の誕生と幼いころについては詞書はなく絵画で説明される。第一図には田植えの風景と武家の館が描かれている。その絵画の中央上段（六行）には、

如来滅後二千八十二年／日本国²⁷人皇七十五代／崇徳院長承二年癸丑／美作国久米押領使／漆間朝臣時国一子／生
するところ

と絵画を説明するための文が記載されている（以下、絵画の説明のための書入れを「説明文」と称す）。如来滅後何

年、日本人王何代に生まれたと説明していることから明らかなように、インド・中国における国王と仏法、僧侶の活動——ことに釈尊——と比較しながら法然の生涯と念仏教化を解き明かそうとする姿勢が読み取れる。

幼少のころも三人の子供が竹馬で遊んでいる絵画（第二「竹馬で遊ぶ図」）で説明される。絵画の中央上方に「この息襦袍の／なかりいてゝ竹／馬に鞭うちて／あそぶところ」との説明文がある。

『善導寺本』の詞書は、上述第一図のあと「諸佛の世を利し給、機に随て益をほとこし、日月の昴を照す、時を測て光を廻す」とはじまるが、法然誕生のことよりも、聖徳太子の誕生の意義について、耽空は、

佛教も又正法千年ハ印土に盛にして、像法のはしめ漢につたはりてのち、用明天王の儲君、舍利をもて生給しを、仏の誕生に准すへき歟。其謂何者、舍利現身に説法し神変をしめし給事仏のこととく也。これを以、我國の正法のはしめとすへきか。

と述べているのであり、舍利を持って生まれた聖徳太子を日本における仏の誕生とみなし、日本国の正法のはじまりだと解釈すべきことを指摘するのである。

③ 父の死と出家

『善導寺本』において文章（詞書）で詳しく叙述されるのが、父漆間時国の死とその遺言、出家のさいの母との別離についてである。

保延七年（一一四一）の春、時国は夜討ちにあい深い傷を負う。時国は、この傷によりまさに命終らんとするとき、敵人を恨むことのないように、これは前世の報いだと法然に教える。父はまた『梵網經心地戒品』を引き、みづからも殺し、人を教えても殺し、方便しても殺し、殺すをもほめ、殺すをみても随喜し、ないし呪してまでも殺す。因果応報、皆殺すに同じである。また、世の九戒というのもこれに同じである。しかれば一向に往生極樂を祈り、自他平

等利益を思うようにと言ひ終えるとともに、心ただしく西方界にむかつて高声に念仏して、眠るように命を終えたとして記している。第三「時国館夜襲の図」には絵画の右上隅に、「生年九歳なる子息（法然）^(小) 敵人の頭に少箭をいたてける」との説明文があるように、炬火を持ち館に攻め入る武士と、室内でそれを迎える親子を描いている。父時国は長刀を持ち、九歳の法然は勇敢に弓をかまえている。

就空は、法然親子を地方武士の父と子として描いているのであり、法然の父時国をして、念仏者としての鎌倉武士の理想像をここで示しているのである。関東において念仏を勧めるときには、とくに強調された場面であろう。また、関東の御家人たちも、法然の生まれと出家の目的を知り、さぞや共感と親しみを持つことができたことであろう。

この保延七年の暮れに、法然は美作国菩提寺の院主観覚得業の弟子となる（第四「観覚得業の許へ入室の図」説明文）。やがて法然は師匠観覚の命で比叡山に登ることになる。幼い法然と後家となった母との別れの悲しみが、詞書・絵画とその説明文（第五「母子訣別の図」）によって紹介されている。

作者就空は「乳房のハムにいとまを申とて、大師尺尊ハ十九の御年、父の大王にしのひ給てひそかに王宮をいてたまひ、今小童は、生母にいとまを申て、二親を佛道に入たてまつらん」と、釈尊の出家とくらべて法然の幼ないことを指摘している。また、平安中期の入宋僧大江定基（寂照）が、大唐に渡り彼の地において円通大師号を賜り「本朝」の名をあげることができたのも、老母の許しがあったればこそであることが紹介されている。

僧の母の理想化は、勝浦令子氏によると、撰関期より僧や文人貴族のあいだですすみ、院政期には母が僧である息子を宗教的救済のよりどころとすることが顕著になってくる。『法華験記』『拾遺往生伝』においては、老母が僧となった息子の積んでくれた功德によって、自らの往生を遂げることが理想とされ、この考えが当時の女性たちにひろく浸透していたことが推測されるという⁽²⁷⁾。ともあれ、母を孝養し、その成仏・往生のための仏事を修することは僧となつた息子の使命とされていたのである。

寂照は永延二年（九八八）慶滋保胤（寂心）を師として出家し、源信に天台教学を学んだ人で、長保四年（一〇〇二）年五台山（清涼山）巡礼のため難波を出て翌年入宋している。真宗皇帝に無量寿佛像や日本の名宝を献じ、皇帝より大師号を授かっている。弟子の念救をとおして日宋交流につくしたが当地で景祐元年（一〇三四）に亡くなった。『続本朝往生伝』によれば、発心以前はただ狩獵を事とする人であったというが、宋への進発のとき山崎の宝寺で母のため法華八講を修している。この八講を『撰集抄』巻九においては、老母の許しに感謝してのことだとしている。⁽²⁸⁾

また、『善導寺本』の絵画の説明文では、産める子に教えられる例として、薩婆悉達が母のために『摩訶摩耶經』を説いたことを述べる。『摩訶摩耶經』には、淨飯王の妻で釈迦の生母摩訶摩耶（摩耶夫人）は、序文に記しているように白馬が胎内に入る夢をみて懷妊し釈迦を産むが、七日後に忉利天に上生した。釈迦は成道後母のために忉利天に昇り説法をしたことを伝えている。

このようにして、子どもを出家させる母の悲しみ、僧となった息子の母への孝養が説かれるので、その後の母の生活が思い遣られるのである。

④ 比叡登山と修学

軌空は法然の才能のすぐれていることをして、むかし晋の叡公が幼くして『法華經』を翻訳しているとき「師匠の人天交接の詞かきわすらい給ける」ことと思ひ合わされるといふ。

ついで比叡山登山にいたる道程が絵画で示されている（第六「上洛の図」）。そのこれから登山する比叡山について、桓武天皇と伝教大師による延暦寺開創をして、

山門にはひとすちに、君と国とをいのりたてまつり、皇帝はふたこゝろまします、法と人とをへくゝみまします

す。

と述べる。天台宗（山門）と天皇（皇帝）との関係をもって、日本における仏法と王法との相依相即の関係を説明する。第七「比叡登山の図」につづき、天養二年（一一四五）法然十三歳のとき、師匠の観覚が西塔北谷持法房源光に宛てた「進上 大聖文殊之像一體」との消息を載せている。文殊像とは法然のことであるが、一文を授けるのに十文をさとする法然をみて、源光は真にただ人ではないことを納得した。

法然の修学については絵画を中心に説明されている。第八「普賢来現の図」により法華修行、第九「出家受戒の図」で久安三年（一一四七）に出家受戒し肥後阿闍梨皇円にしたがい天台六十巻を読んだこと、そして久安六年十八歳で黒谷上人（叡空）の禅室に入った第十「黒谷上人と対面の図」へと場面が展開していく。法然という名前については、この黒谷上人に発心の由来を問われ、それに答えたことに由来するとして、次のように説明されている。

発心の由来を問給ふに、親父夜打のために早世せしより、この遺訓にまかせて、遁世のよし思たちける次第つふさにかきをき給けれハ、さてハ法然具足の人にこそましますなれと侍しより、法然といふ名ハのたまひける。

ここでも、武士の子法然の発心が、父時国が夜討ちにあい早死にしたためであることが、くり返し強調されている。

さらに第十一「青龍出現の図」で『華嚴經』を開き見たとき「くちなわ」が出現したこと、第十二「屋内放光の図」により暗夜に経論をみるのに灯明もないのに室内が昼間のようであったという奇瑞を絵画にあらわして、法然の才能の非凡さを語り、その両方をそばにいて信空上人も体験したと記している。

ところで、巻四の法然の七七日の信空執筆「供養願文」によれば、信空が叡空の室で最初に出合ったのは法然二十五歳、信空十二歳のときである。それから、法然が往生するまでのあいだ、常に法然に随時したと述べている。法然が二十五歳のときということは保元二年（一一五七）である。『善導寺本』では、保元元年の記事の前に、二人の奇

瑞体験を記している。耽空は、法然の一生涯の身のまわりの世話をした弟子として、信空を登場させているので、信空が法然に修学当初より随時していたことを強調しなかったのであろう。

保元元年になると、法然は求法のため修行するとしてまず嵯峨（釈迦堂）に参籠する。そのうち南都の贈僧正藏俊に法相宗を学び、中川少将より鑑真の戒を受け、大納言律師寛雅に三論宗を学んだと、南都の仏教も学んだことを記している。藏俊は法然の優秀さにかえって帰依し仏陀と称して供養を述べ、寛雅は弟子の深き心に達しているのに感涙をながした（第十三「上人行脚の図」、第十四・第十五・第十六「学匠訪問の図」）。そして第十七「道場観を修す図」では真言の教文に入り道場観を修したことを紹介している。

⑤ 四十三歳・七万遍の念仏

このようにして、耽空は「自他諸宗経論章疏、真言止観のをぎろ心を三観の弥陀にあらはして、悉く九品の淨界にすまし給」として、法然が仏教各宗にわたる幅広い修学を経て阿弥陀信仰に到達したことを、絵画とその説明文、文章（詞書）で説き明かしたうえで、

事のはしめハ高倉院の御宇安元々々年乙未齡四十三より、諸教所讚、多在弥陀の妙偈、ことにらうたく心肝にそミ給けれハ、戒品を地体としてそのこえに毎日七万遍の念仏を唱て、おなしく門弟のなかにもをしへハしめ給ける。
上來雖説定散兩門之益、望佛本願意在衆生、一向専称弥陀佛名、南無阿弥陀仏々々々。

と、法然が念仏信仰を門弟に教えるようになったと結論するのである。「諸教所讚、多在弥陀の妙偈」というのは『摩訶止観』の注釈書である湛然（七一―八二）の『止観輔行伝弘決』、「上來……」は善導の『観経疏』の「散善義」からの引文である。

『善導寺本』では、法然が戒品を地体（根底とか本質の意）として毎日七万遍の念仏を唱えるようになり、「門

弟」にも教えるようになったのは、各宗において「弥陀」を讃嘆しているためだとするのである。この時点においては在俗の人達に念仏を勧めたとはしない。

そして法然の信仰体験を絵画により明らかにしているので、その絵画中の説明文と詞書とを紹介しておく。

第十八「三昧現前の図」では、法然が浄土を観想すると、はじめの夜には宝樹が現じ、次の夜には瑠璃の地が示され、後には宮殿を拝した。

第十九「善導来現の図」では、唐の善導和尚が裳すそより下は阿弥陀如来の装束で現れて、法然にさまざまなことを説示した。

第二十「勢至出現の図」では、勢至菩薩が、仏になる修行をしているとき念仏の心をもって無上忍に入ることができたので、念仏する人を浄土に帰せしめようと述べている（『首楞嚴經』よりの引文）ことより、法然が念仏三昧成就獲得の人であるという。

さらに第二十一「三尊出現の図」では、無量寿仏の化身無数、観音・勢至が当来して、この行人（法然）の所に至ると絵画を説明している。

⑥ 大原の念仏

耽空は、法然の念仏往生の教えが諸宗通達の結果であることを説き明かしたあと、さらに絵巻を聴聞する人たちを納得させるために、南北の名匠たち・山門の僧侶たち・遁世の人びと・大原の上人たちとの論談の場を設定している。法然の最初の伝記絵巻である『伝法絵流通』においては、法然の念仏が「大原談義」をもって、日本国における顕密の諸宗に認知・承認されたものと主張するのである。巻二以下において法然の念仏教化が仏法王法相依論にもとづく正当なものであり、法然の遠流やその滅後の墳墓破却がいかに不当なものであったかを主張するためにも伝記構成

上重要な場面なのである。

『善導寺本』の「大原談義」を検討するまえに、大原の念仏について検討しておくことにする。

「大原問答」で著名な大原勝林院は、三千院の北に位置し、魚山と号して天台宗延暦寺の別院である。明治以前は院内四坊の総称であったが、明治維新以後は本堂の専称となっている。寺伝では、勝林院は承和二年（八三五）に慈覚大師が唐より声明を将来し、それを取入れた天台声明の根本道場として創建されたとされる。寺は一時衰退したが源時叙（寂玄）が長和二年（一〇一三）中興した。寂玄没後は、大原流と称される声明音律を代々の住僧が継承するとともに、天台宗の談義所、写経所ともなっていた。²⁹

「魚山」とは中国の長安の郊外にある山の名称である。正徳元年（一七一）成立の『山州名跡志』の「魚山来迎院」の項では、

長安城ノ良ニ天台山アリ。其支山ニ大原魚山ト号ル山アリ。陳思王ノ世、梵唄声明ノ音調ヲ此山ニ興隆セリ。慈覚大師入唐ノトキ、彼山ニ到テ、其曲調ヲ伝来レリ。是ヲ山門ニ伝フ。良忍上人是ヲ中興ス。仍テ当寺ヲ開テ彼譜ヲ伝止メ、長ク声明ノ本山トナス。今猶号大原声明。

と解説している。慈覚大師が将来した叡山東塔常行堂の系統の不断念仏と声明は大原に伝えられていた。西口順子氏はこれを基本として「融通念仏」と称せられる念仏の節づけをしたのが良忍であったという。そして、大原においては勝林院を中心に念仏三昧が行なわれ一つの衆をなし、来迎院を中心に良忍を中心とする同行集団が形成されたと指摘されている。³⁰

ところで、佐藤哲英氏によれば、慈覚大師が入唐求法したころの五台山や長安で行なわれていた音曲入りの五会念仏は善導系の口称念仏であったという。大師が叡山の常行堂に将来した念仏は善導流の欣求浄土業であり口称を重んじる不断念仏であったようである。³¹ 菊地氏は「黒谷別所と法然」において、源信が「二十五三昧起請」の中で「慈覚

大師、伝清涼山の引声、残音韻、叡岳行法始起、四明流盛一天」と語っていることより、二十五三昧はこの善導流をうけたものとされる。そして源信・懐空・良忍・叡空とたどることにより、凝然が『浄土法門源流章』において、源信の『往生要集』が歴世相伝され黒谷叡空が伝持し、それを法然が学ぶことで義理通達し善導和尚をもつて所依の宗師としたとの記載がよく理解できるとされて、黒谷における二十五三昧と法然との関係を説明されている。³²⁾

『善導寺本』第二十二「大原談義の図」には、法然が列座の人びとに語りかけている様子が描かれている。大原に隱遁した願真は、「大原上人」として如法経を勸進し唱導の師としても活躍している。本成房湛數は吉田経房の日記『吉記』元暦二年（一一八五）五月一日条において「今日建礼門院有御遁世、戒師大原本成房云々」とみえるように、建礼門院の出家の戒師である。また、『平家物語』灌頂卷では、建礼門院は東山長樂寺の阿証房印誓を戒師として出家し、大原に入り仏道修行に入ったとしている。

大原上人と黒谷上人の貴族社会における説戒や念仏、唱導には共通するものがある。貴族からすれば、大原上人や黒谷上人たちにもとめた「宗教」は同じ信心であり供養であった。法然と印西は良忍―叡空、湛數は良忍―葉忍といふいずれも良忍からの系譜の円頓戒を相承している。³⁴⁾藤原長兼の日記『三長記』建久六年（一一九五）七月十三日条によれば、法然・印西・湛數の三上人は兼実の娘中宮任子の懐妊のさいには、おのおの五十日間結番している。『三長記』『玉葉』『明月記』を読んでも願真・湛數・印西と法然の貴族社会における宗教活動にはなんらの差異も認められないのである。

『善導寺本』では大原談義の年月は記載されていないが、『源空聖人私日記』や『弘願本』では文治二年（一一八六）のことだとされる。その文治二年の春には、『平家物語』灌頂卷によると、後白河法皇が大原の建礼門院の庵室を訪れている。その庵室の光景がつぎのように叙述されている。

御庵室に入らせ給ひて、障子を引あけて御覧すれば、一間には来迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の糸

をかけられたり。左には普賢の画像、右には善導和尚、并に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書もをかれたり。蘭麝の匂に引かへて、香の煙ぞ立のぼる。かの浄名居士の、方丈の室の内に、三万二千の床をならべ、十方の諸仏を請じ奉り給ひけんも、かくやとぞおぼえける。障子には諸経の要文共、色紙にかいて、所々におされたり。其なかに、大江の貞基法師が、清涼山にして詠じたりけん、「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前」とも(35)かかれたり。

阿弥陀三尊の中尊阿弥陀仏像には五色の糸がかけられていた。三尊の左には普賢菩薩の画像が掛けられ、右には善導和尚と安徳天皇の画像がかけてあった。また、『法華経』（八軸の妙文）と善導の五部九巻の著書（九帖の御書）が安置されていた。(36)さらに前述の大江定基が五台山で臨終の時に詠んだとされる詩の一節が障子に貼られていた。この庵で年月を過ごした建礼門院は、中尊にかけた五色の糸を手にとり念仏往生をとげたのである。

この「灌頂卷」における釈迦と弥陀とともに善導をも合して尊信する念仏信仰は、証空の門流（西山義）における念仏信仰と共通するものがある。そのことを、福井康順氏は証空門下の写経を納めた大念寺阿弥陀仏像胎内納入経から指摘されている。胎内には浄土三部経・『梵網経』・『法華経』如来寿量品・『観経疏』玄義分が納められている。(37)これらの写経は仁治三年（一二四二）ころ、後鳥羽院の皇子の道覚法親王のためになされたものである。中西随功氏によれば、道覚法親王は元久元年（一二〇四）の生まれで、父上皇と和歌を通じて親交の深かった慈円のもとに承元二年（一二〇八）五歳で入室している。承久の乱にさいしては、父のため無動寺大乘院において不動法を修している。乱後は西山往生院に籠居していたが宝治元年（一二四七）には慈源（九条道家息男）のあとをうけて第八十代の天台座主についている。その西山籠居中に造立されたのが大念寺に伝来する阿弥陀仏像なのである。(38)

耽空が『伝法絵流通』を執筆した嘉禎三年（一二三七）ころの大原の念仏は、『平家物語』灌頂卷にみられるような釈迦・弥陀・善導をあわせた念仏であったと推測できるのであり、貴族社会に受け入れられていた山門の念仏であ

ったということがきよう。

⑦ 大原談義

耽空は、大原には嘉禎三年（一二三七）のころ、関東の人たちにも著名な南北の僧侶に参集してもらわなければならなかった。以下その経過を紹介する。

法眼顕真は、大原に籠居していたときに、法印永弁と「出離解脱のはかりこと」と「頓証菩提のいりか」とについて談じたことがある。そのとき永弁は、委しくは法然上人にお尋ねされたらよいと申し帰山した。

よって顕真は法然を自房の龍禅寺に招いて、浄土の教文と念仏往生の義について尋ねることにした。その場には、南北の名匠・遁世の人びとや大原の上人たち、山門の僧侶たちも参集した。龍禅寺に集まったのは十七名で、その内訳は僧都明遍・已講貞慶・重源和尚・印西上人。処々の遁世の人びと。当所大原の湛敷・蓮契師弟の上人ら十余人。山門久住の智海法印・静厳僧都・覚什僧都・証真・堯善・浄然法眼・仙基律師らである。

面々が諸宗に立ち入り深義論談した。そのなかで、法然上人が散心念仏の時にかない、おりをえたものであることをつづさに解説した。

法然の話を聞いた房主顕真は、双眼に紅涙をながし、一心丹精をぬき出でて自ら香炉をとり持仏堂において旋遶行道し高声念仏を唱えた。列席の南北の名匠たちも西土の教えに帰し、上下諸人も各おの（異）口同音に三日三夜間断なく念仏を唱えた。「総て信男信女三百餘人、参礼の聴衆かすをしらす」というありさまとなった。

また、湛敷の発起により、来迎院・勝林院等においては不断念仏が始められた。これより以後、不断念仏は洛中辺土の処々の道場において修せられ、盛んになったというのである。

やがて顕真は召しだされ、天台座主に補し僧正に任ぜられた。顕真は「末代（の）高僧、本山の賢哲」である。諸

宗の碩徳たちも、率して「莫非上人云々」と法然を讃嘆した。このようにして、一天四海、念仏を以て口遊びとするようになったのであると述べて『善導寺本』巻一は終っている。

卷二の第三十七「座主問状の図」における絵解きや、巻四における「本山のため、いかなるあやまりかきこえけん」としての、嘉禄三年座主円基のときの大谷廟堂破却の叙述を考えあわすと、顕真が法然の念仏を受容してのちに天台座主となったことに、大きな意味がある。

また、ここで山門（延暦寺）を「本山」と説明していることで、就空が山門に所属している僧であること、すなわち、『善導寺本』が山門を本山と仰ぐ法然の弟子就空が記した法然の伝記絵巻であることが、聴衆に知らされているのである。

就空は、先師法然上人の念仏教化のありさまを絵解きするのに先立って、先師上人が山門所属の僧であり、その念仏は山門の念仏にはかならないこと、すなわち天台座主も唱える「天台宗の念仏」であることを強調しておきたかったのである。

増上寺には、慶長十五年（一六一〇）に存応が後陽成天皇より拝領したと伝える残欠二本の零本である法然の絵巻がある。江戸時代の外題題箋には「法然上人絵伝 上」と記すが、制作当時の内題等はない。法然の絵巻のなかでも制作年代が古く描写も優秀、鎌倉時代に制作された絵巻物の中でも屈指の作品だと評価されている。⁽³⁹⁾

その下巻第六段に「大原談義」がみえる。

法眼顕真おはらに居住のとき、諸宗の学者をのく群衆してたかひに自宗のむねをのへ、ほこさをあらそふきさみ、上人諸教まことに殊勝なりといへとも、濁世の凡夫のため散心念佛もとも機にあひかなへるよしを談し申さるゝに、顕真涙をなかして、身つから香炉をとり、行道して高聲念佛、諸宗の人々おなしく三晝夜勤行のついでに湛叡上人^(教)来迎院に不断念佛を始行せらる。これおはらの念佛のはしめなり。

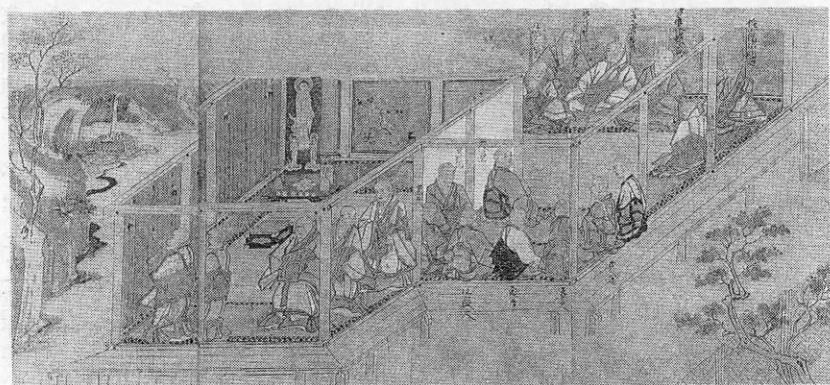


図1 増上寺本「大原談義」（日本の美術『法然上人絵伝』至文堂より）

法眼顕真という表現や、絵画中の着座の僧の名前よりも就空の絵巻を要約したものである⁽⁴⁰⁾。この要約のしかたからも、『善導寺本』における本段の目的を明らかにすることができ。すなわち、顕真のもとにおいて「諸宗の学者」が法然の念仏が濁世の凡夫のためのものであることを認めたこと。大原の念仏は法然の教えによって始まったものであることである。『増上寺本』の絵画を説明しておくと、「談義の席」と「持仏堂での行道念仏」の二場面からなっている。「談義の席」では、上段に顕真を中心に着座し、下段に法然を中心に円座する。『善導寺本』と比較すると、明遍の席が異なるのと、説明無しが覚什・堯禪・貞慶・仙基の内の一人ということになり、残り三名が描かれていない。「持仏堂での行道念仏」では、先頭で香炉を持っているのが顕真である。弥陀三尊の掛幅と龍禪寺の裏庭も描かれている。

(二) 『善導寺本』巻二

① 法然と天皇

『善導寺本』巻二は、法然の念仏が「大原の談義」により天台宗や南北の名匠たちに認められたことにより、法然の都における宗教活動を説き明かす巻である。絵画は第二十三「上西門院受戒の図」にはじまり、第三十九「顕光顕現の図」で終わっている。

最初に、鳥羽天皇第二皇女である上西門院（一二六〇・八九）に七日間説戒したことを述べる。上西門院は平治元年（一一五九）院号宣下をうけ、永暦元年（一一六〇）仁和寺法金剛院において落飾、真如理と称した。文治五年（一一八九）七月二十日、六十四歳で没している。説戒の第七日結願の日に前栽の叢から蛇が出てきたが、説戒の功により天に登った。耽空は、上代に聖が『無量義經』を暗誦すると五百の蝙蝠がこの經の功德により五百の天人となり切利天に生まれたとの話を出して、希代の勝事であるとする（第二十三、「上西門院受戒の図」）。

『愚管抄』卷六には、上西門院は『法華經』の持經者で兄の後白河法皇より早く読むことができたことを伝えている。『無量義經』は内容が『法華經』序論に相当することより、『法華經』の開經とされる經典である。耽空がその功德との関係で法然からの受戒の功驗を説いていることに注目しておきたい。また源氏は為義・義朝・頼朝と三代にわたり、女院に接近することで政治的進出をはたしたといわれているが、関東との関係を一言すれば、義朝・頼朝父子と上西門院とは深い関係にある。頼朝の母熱田大宮司の女は上西門院に仕えていたし、頼朝も上西門院に仕えて上西門院藏人となり、右兵衛権佐に任じられている。義朝・頼朝の栄達は上西門院をぬきにしては考えられないとの指摘もある。⁴¹

ついで、釈尊から陳の南岳大師、道邃和尚と相承され、本朝の伝教大師が慈覚大師に授け、慈覚大師が清和天皇に授けた戒を法然が高倉天皇に授けたという。今当帝である高倉天皇に法然が十戒を授けたことをして、中国において陳・隋二代の国師であった天台大師が大極殿において『仁王般若經』を講じたこととくらべている。「九帖附属の袈裟、福田をわが国にひらき、十戒血脈の相承、種子を秋つ洲にまく」として、安然是袈裟の付属を受けていない。相応は念仏をひろめたが戒義を説かない。耽空は「彼此かねたる、今の上人也」と法然を讚美するのである。

第二十四「禁裏の図」には、

何の殿侍やらん、紫殿／只今源空上人めされ参られ侍る／何事に侍やら覽／剋限よくなりて侍らへ、聴聞に参り

侍覽／清凉殿とこそふれ侍れ（番号省略）。

との説明文がある。この禁裏の絵画は、説明文のような問答で絵解きされていたのであろう。

航空は法然の宗教活動を上西門院と高倉天皇への授戒から説きはじめるのである。法然の天皇への授戒は、序文との関係で理解すべき話である。法然が積尊から相承した戒を高倉天皇に授けたとすることで、「国王と仏法」との関係にはかならないことを説明しようとしているのである。法然を日本国の「国師」とみなしているのである。

② 東大寺大仏勸進

つぎに東大寺大仏の勸進の段へとすすむのであるが、第二十五「勸進内議の図」・第二十六「善導和尚真像礼拝の図」はともに上段に詞書があり、絵画を中心に語られた段である。

治承四年（一一八〇）十二月、平家乱逆のとき東大寺が炎上した。その勸進奉行に藤原行隆が任ぜられた。行隆は勸進上人を法然に依頼したが、法然は器にあらずとして「同行修乗房」^(Ta)を推挙した。勸進にさいしては、奉加の得不得を知る手立てとして、法眼顯真の発案で『法華経』の文字数は六万九千三百八十四字であることより、その一文字を阿弥陀仏の上に置いて授け名前とすることにした。また、重源より唐の善導和尚の真像が法然に奉られたので、道俗男女がはじめて礼拝できるようになったと叙述している。

重源の阿弥陀仏号の授与については石田尚豊氏の研究があり、⁽⁴⁸⁾『南無阿弥陀仏作善集』には建仁二年（一一二二）より二十年以前から開始したことが注記されている。⁽⁴⁹⁾堀池春峰氏は、二十年前とは寿永二年（一一八三）であるが、この年は重源が陳和卿の指導で大仏の修理を始めた年であることより、修理を機縁に阿号授与が開始されたと考えておられる。平成元年から修復が開始された東大寺南大門仁王像の東方安置の咩形像の鉢内より発見された『宝篋印陀羅尼経』二巻の結縁交名からも、阿号授与と勸進活動についての新たな事実が判明している。『宝篋印陀羅尼経』に

は建仁三年（一二〇三）八月の奥書があり、各おのの巻末に書き加えられた結縁交名は合せて二百十名で、そのうち阿号を称する僧は南無阿弥陀仏（重源）を含めて百四十八名、七〇パーセントに達しているとのことである。⁴⁴

『善導寺本』の大仏勸進の話は、大原龍禪寺において顕真と重源とが法然の念仏の教えとともに聴聞し、讃嘆したという巻一「大原談義」を前提にしないと、理解できない話である。また、大原談義の座席において、法然の隣に重源を座らせて、親密な関係を強調していることより、聴衆が法然の「同行修乗房」が納得できるのである。勸進上人を依頼したとされる行隆は信空の父であるが、そのことについてはなんらの説明もない。この東大寺大仏勸進の段は、山門出身の法然門下の念仏者の関東における勸進活動の展開を念頭に創作されたのではと、筆者は推定している。⁴⁵

③ 法然の活動―説戒と念仏―

後鳥羽法皇⁴⁶の御宇の建久元年（一一九〇）秋に、法然は清水寺での説戒の座において念仏をすすめた。よって寺家大勸進沙弥印藏は滝山寺を道場にして不断常行三昧念仏をはじめた。能信が開白発願して香炉をとり行道をはじめた。願主印藏・僧範義以下比丘・比丘尼の数は知れなかったという。このあいだに、南都の古年童が出家して念仏衆に交わり、松苑寺のあたりにおいて高声念仏して私宅往生をとげた。能信が「如法經の紙ぞをうへながら、往生人の縁をむす」んだと記している。

また清水寺の滝について、この滝は三世にわたるもので大日如来の鑿字の智水であることを、仁和寺の入道法親王の夢想の話として語っている。そして、親王が滝に詣でることは現世安穩・後生極楽との歌を詠じたことを紹介している（第二十七「清水寺滝の図」）。ついで靈山寺において三七日の不断念仏があったさいに、その第五夜に勢至菩薩が行道したことを明かしている（第二十八「勢至菩薩行道の先に立つ図」）。

上述の能信については、

弟子能信、吉水の禪房に参て天台宗文句第一巻読書の日、上人、世中のつねならぬ事を、教訓詞ニ云……。

として弟子能信が吉水の禪房に通つて、法然より『天台宗文句』の読書指導をうけていたという(第二十九「弟子能信読書の図」)。「弟子能信」と『善導寺本』において法然の弟子として最初に登場するのが、この段の能信なのである。絵画では法然が読書指導をしている。法然の吉水の禪房では天台宗の書物が学ばれていたのであり、弟子たちも法然から天台教学を学んでいたとするのである。

つぎに、法然が後白河法皇に召され説戒ならびに『往生要集』を談じたことを紹介している。法然の念仏教化を述べるのに、ここではじめて『往生要集』が登場する(第三十「殿上説戒の図」)。法皇は院勅を下して、藤原隆信に真影をうつさせ、蓮華王院の宝蔵におさめたというのである(第三十一「隆信真影を写す図」)。

法然の戒と念仏の両方に後白河法皇が深く帰依されたことを明らかにしたあと、仁和寺の法親王も御師徳のよしめさるといへども、法然は隠遁の身であるため祇候しなかったといい、授戒と念仏について、

雖然八条女院、^(ママ)慇懃門女院、宜陽門女院、七条女院、准后宮、大臣、諸卿、戒文授者、念仏の帰依おほしといへとも、関東にハ熊谷入道、鎮西にハ聖光等、教門に入しより、他宗をのそかさるともから。

と記している。受戒者と念仏の帰依者とが区別して記載されていることに注目したい。

法然より受戒したという女性について検討しておきたい。ここに登場する女性は後白河院と高倉天皇に關係する女性である。すなわち、上西門院と八条院は後白河院の妹であり、慇懃(富)門院と宜陽門院は後白河院の娘で高倉天皇の妹である。また、七条院は藤原信隆の娘で建礼門院に仕えていたが、高倉天皇の典侍となり守貞親王(後高倉院)と後鳥羽天皇の母である。『善導寺本』においては、法然の女性への授戒については、日本の国王の妹や国王の母へのものであったとするのである。

この詞書のあと第三十二「弁阿及び熊谷入道入室の図」がある。絵画中に「熊谷入道」の銘記と、聖光については

「弟子弁阿」は上人入室の後、伊予に派遣されて念仏を弘め、鎮西に帰国して光明寺を建立し、往生の本懷を遂げたことを説明している。「弟子弁阿」と「弟子」をつけてよぶのは、二人目である。

ところで、「他宗」をのぞかないという表現より、ここでは自宗とは「念仏宗」を意味している。耽空にとって「自宗」とは「天台宗」であるので、耽空が記載したとは考えられない。なによりも、聖光入滅が嘉禎四年であることより、絵図中の説明文の「遂往生宛如本望」との記載が矛盾し後補と考えるしかない。田村円澄氏は『善導寺本』とほとんど同一で誤字まで共通している『法然上人伝記』（『九卷伝』）巻二とを比較され、聖光の記事も女院の記事も念仏教団の布教が朝廷におよんだ時期に追加されたとみるべきだと指摘されている。⁴⁶

④ 後白河院と「六時礼讃」

建久三年（一一九二）秋になると、この春に亡くなった後白河法皇の菩提を回向するため大和入道見仏が八坂の引導寺において七日間念仏をつとめた。「六時礼讃」の先達は心阿弥陀仏がつとめたが、二条院の所蔵していた能信が授けた法則次第によった。この結願の日には種々の捧物があつたが、法然はことのほか気色だち戒めたこと、法然の言葉を紹介している。

念仏ハ自行のつとめ也。法王の御菩提に廻向したてまつるところに、布施みくるしき次第也。ゆめ／＼あるへからず。

これを「六時礼讃のはじめ也」としていて、後白河法皇の追善供養との関係で「六時礼讃」が論じられている。国王と仏法との関係で「六時礼讃のはじまり」が絵解きされていることに注目しなければならない。第三十三「六時礼讃修行の図」には、善導の「往生礼讃」より「南無釈迦牟尼仏等、一切三宝我今稽首礼、廻願往生無量寿国」を引き、住蓮・安樂・心阿弥陀仏・沙弥見仏の名前を銘記するとともに、それを見つめる法然の姿が描かれている。

後白河院はこの年の三月十三日死去したが、その臨終の善知識は大原の本成房湛敷であり、院は眠るがごとく念仏往生をとげられたという（『明月記』『玉葉』『吾妻鏡』）。兼実は、院の仏教に帰依する徳は殆ど梁の武帝に甚だしと記している。見仏とは院の近臣藤原親盛のことで、葬礼にさいして素服を賜った。十五日の葬送のさいに北面下牕の一人として炬火役を勤め、その夜に出家をとげている。見仏が法然の門下となった経過についてはよくわからない。住蓮・安樂は『愚管抄』巻六にみえるように、善導の『往生礼讃』による念仏を院の女房たちにすすめて首を切られたことでよく知られている。『三長記』によれば、安樂房蓮西と法本房行空の二人は「法然の一弟子」とみられ、その諸人にたいする勸進が偏執、傍輩に過ぎると興福寺から批判されている。また、元久三年（一一〇六）二月には、興福寺より「源空仏法の怨敵也、子細言上度々了、其身並弟子安樂・成覚・住蓮・法本等可被行罪科」と、法然とともに仏法の怨敵として院に訴えられている。⁽⁴⁸⁾建保五年（一二一七）五月と貞応三年（一二二四）五月の「延暦寺大衆解」にみられるように、法然の門下の念仏声明は亡国の音と山門からも批判された。⁽⁴⁹⁾このような興福寺や山門からの批判を十分に承知したうえでというか、むしろあったからこそ、航空は八坂引導寺における後白河法皇追善の「六時礼讃」の話を創作したのだと想像できる。

⑤ 大仏殿説法

つづいて第三十四「大仏殿説法の図」がある。それにつづく詞書は、

観經曼陀羅、唐より奉渡して開題称揚の次ニ、天台の大乗十戒を解し給に、いさゝかの訛謬侍りけれども、當寺の古徳のなかに、兼日の夜の夢に、聊（か）靈異しめすことありける間、件の次第、さきたちて披露侍りければ、大衆の中に、おの／＼くちをとちて云事なかりけりとぞ、都の人／＼ハ巷説し侍ける。

となつてゐる。

この詞書が、東大寺説法の内容として絵解きされていたとすれば、（法然が）東大寺において、観經曼陀羅が「唐」より渡来したとき、開題称揚の次いでに天台の大乗十戒を解説した。その解説においていささかの間違いを犯したが、あらかじめ兼ねてみた夢の話をしておいたので、大衆たちも問題にはしなかったというのである。法然の犯した誤りとは『九卷伝』巻二では、法然が我が山（比叡山）は大乗戒であるが、東大寺は小乗戒だと解説したことだとしている。⁵⁰

耽空は、日本国の仏法王法興隆の象徴である東大寺大仏殿において、南都の戒律よりも天台円頓戒の優越を主張するのである。この主張も、先に法然の修学や大原談義における南都の碩学の法然への帰依、東大寺大仏の勧進が法然や願真という天台僧の助力により達成できたとの説明があることで、聴衆への説得力があるのである。

⑥ 念仏往生と「七箇条起請文」

耽空は法然の説戒・念仏と仏法王法の興隆について叙述したあと、現世祈禱と「法然の念仏」との関係について説明している。

無品親王静忠の御悩のさいには、門徒の高僧らが『大般若経』を転読して各おの祈請するが、ご平癒の気色がなかった。よって親王が法然上人を招いて、臨終の次第のことなどを尋ねられた様子を描いたのが第三十五「親王上人対座の図」である。

親王と法然が対座しているが、親王の問いを「令旨仰（せて）云（く）」として、「いかゞして生死を此たひはなれ、後生たすけさせ給へ」と載せて、それになんて法然が、

往生極楽の御願、御念仏にハしかす。仏曰、光明徧照、十方世界、念仏衆生、撰取不捨。

と返答したとして、『観無量寿経』第九真身観の偈文（撰益文）を引いている。

耽空は、病氣治療のための祈禱は否定していない。絵画には障子を隔てた隣の部屋で卷子本の『大般若経』を読む

僧正行舜・僧正公胤・法印顯忠・法印円豪・僧正覺実の姿と法印公雅・法印道嚴・法印信觀の名前が記されている。

無品親王靜忠とは、後白河院の第八皇子靜惠法親王（一一六四～一二〇三）のことで、聖護院に入り、建久七年園城寺長吏に補せられたが、建仁三年（一二〇三）年三月十三日に四十歳で亡くなっている。したがって門弟の高僧というのは園城寺の僧のことである。僧正行舜（一一四五～一二〇八）は園城寺学頭としてしばしば宮中の講会に参加し、のち園城寺別当となっている。僧正公胤は後述するように法然七七日の導師である。

法然の活動を絵解きしたあとに、第三十六「座主問狀の図」がある。元久元年（一二〇四）甲子十一月七日「普告門人七箇条の起請文に云く」として、法然の七箇条の起請文を紹介している。

（一）一句の文も字ばないで真言・止觀を破すこと。（二）無知の身であるのに物を論じること。（三）別解の人に本業を捨てよと、嫌い嗤うこと。（四）念仏に戒行なしといい、もっぱら婬酒食肉をすすめ、律義の人を雑行と名づけ、弥陀の本願に造惡を恐れることなかれと説くこと。（五）聖教を離れ師説に無い事をもって、智者を笑う事。

という門人たちの念仏教化の方法について具体的に批判する。そして、

（六）痴鈍の身をもってことに唱導を好み、正法を知らずしてほしいままに妄説をなし、世間の人を誑惑させる過は殊に重い、これは国賊である。

と述べて、（七）右は一人の説であっても、積むところは予（法然）一身の衆惡となる。これは弥陀の教文を汚し、師匠の惡名をあげるものである。不善の甚だしいのはこれに過ぎるものはないとする法然の起請文を紹介するのである。耽空は上述の法然の修学や教化活動と、門下の活動とがいかに懸け離れたものであるのかを、あざやかに説明（絵解き）してみせるのである。七箇条の概略を紹介したあと、

以前起請如此、一文を学する弟子等、年来、念仏を修すといへとも聖教にしたかふ故に、人の心、よの聞をおと

ろかさす。近来、不善のともから、たゞ弥陀の浄文をうしなふのミにもあらず、兼ハ釈迦の遺法をけかす。何不加炳誠乎、猶背制法ニ輩は、是非予門人、魔眷属也。更（に）不可来草庵、自之以後、各随聞及、必被触之、余人勿相伴、若不然者同意人也。彼過如作者文、其略之、所詮大旨如此。

と起請文のなかの法然の言葉が引用されている。

考えてみたいのは、七箇条起請文をとおして耽空は何を語ろうとしているのかということである。「一文を学する弟子等、年来、念仏を修すといへとも聖教にしたかふ故に、人の心、よの聞をおとろかさす」と述べているが、これは前述の弟子能信のことを指している。耽空が法然の弟子と認めるのは山門を本山と仰ぐ「天台僧」である。このことから、耽空が天台宗のなかでの法然の念仏の隆盛を願って法然の伝記を執筆したことは、明白である。

他の法然伝との違いは、起請文を省略して掲載していることであるが、その省略の仕方に『善導寺本』の特色が見出せる。『善導寺本』では「大旨如此」として省略されている部分には、後の法然伝以下の伝記類においては、「是故今日催四方行人、集一室告命」とし（『弘願本』）、最後に門下の連署がある。⁴¹

『善導寺本』では予の門人に告げるとし、予の門人の「念仏上人等」としないことで、「念仏上人」らを法然が一室に集めて告命したことには言及しないのである。二尊院所蔵「七箇条制誡」には「普告余門人念仏上人等」とみえ、「余の門人と号する念仏上人ら」という。また「伝法絵」系統では法然の門人に告げたとし、法然の門人と号する人に告げたとはいない。

耽空は法然の門下との間に一線を画し、「法然の念仏」のみを説明し、法然の門下の念仏上人たちの念仏勧進について、その正当性を主張しないのである。法然との直接の結縁を語るのである。このことは、この耽空の「法然伝」に説かれている「法然の念仏」以外は法然の念仏とは認めていないということでもある。

⑦ 兼実・聖覚・隆寛と『選択集』

つづいて第三十七「隆寛への選択集付与の図」がある。この段は詞書がなく、ただ絵画の傍らに説明を加えるにとどまっている。絵画によって事実を示そうとしている段である。その説明文によれば、法然は元久三年（一二〇六）七月吉水を出て兼実の小松殿に遷った。権律師隆寛が小松殿に参向したとき、上人が御堂の後戸に出て一巻の書を隆寛の胸間に差入れた。これは月輪殿（兼実）の仰せによって撰じた『選択集』であるという。法然はひそかに隆寛に与えたのである。

『選択集』については、兼実の命により執筆したものと簡単に記述しているだけなので、『善導寺本』の絵画と説明文からは『選択集』がどのような内容の書物であるのかはわからない。その内容については、絵解き法師が説明したのであるが、この場面の絵解きを聴聞した人たちは、法然が小松殿で天台僧権律師隆寛に与えたと述べるだけなので、諸宗から非難されている書物とは誰も思わなかったであろう。

禅定殿下（兼実）と法然と法印聖覚と同じ日の同じ時刻に瘧病になった。兼実は除病安寧の効験を期待して、安居院（聖覚）を屈し、浄土の教文を講じ弥陀の本誓を解説してもらうことにした。

殿下至誠心をいたし、上人深心をふかくして、御導師廻向発願の心をねんころにし給ければ、三所に三心を具足して、一座に御帰依あらはれにけりといふ事、末代の奇特、天下にひよくところ如件。

と耽空は述べている。第三十八「瘧病祈願の図」によれば、導師を勤めているのは聖覚である。兼実が帰依したのは浄土の教文であり、阿弥陀仏にたいしてであった。

このことがあって、兼実は法然に浄土の教文を談じてもらうことになったが、元久二年四月一日、法然が月輪殿から退出し南庭にいたるとき、上人の後ろに頭光が現じた。これをみた兼実について「禅定殿下、くつれおりさせ給て、稽首帰命したてまつりて、悲涙千行万行」したと記している（第三十九「頭光顯現の図」、絵画中の僧に「沙弥戒心」（藤原隆信））

「阿闍梨尋玄」の銘記。

兼実の法然への帰依が深まった結果、兼実が法然に『選択集』の執筆を命じたのであるが、耽空は二人の交流を説明する前に、隆寛への『選択集』の付与を説明している。また、兼実の浄土信仰は念仏往生のためではなく、除病安寧の効験を期待してのものであったとしている。耽空は、この場面では摂政兼実と法然との交流が、天下の大導師聖覚を通じてはじまったものであることを強調したかったのである。

⑧ 上巻の識語——まとめ——

耽空は、法然の宗教活動を紹介したあと、「上人は始めは戒をときて人に授(け)、後にハ教を弘てほとけになさしめ給」うと述べている。耽空は法然の教えを持戒為初、持戒為先として、

故に於日域而施無畏、宛如照観自在王之蒼天、於月輪而示有、光明可知得大勢至之白毫、諸仏菩薩の大悲利生をおほくましませとも、安立器世間のはじめより、劫末壞劫のすへまでは、日月のひかりにふれざる情非なかりけり。

と讃嘆評価しているのである。

すなわち法然は、日本の人びとに一切の恐怖の念がないようにしたのであり(無畏施)、それは観音・勢至の両菩薩が日月を照すようなものである。諸仏菩薩の利益はあまたあるが、この山河・大地・草木など有情を入れる器ができたときより(安立器世間)、この世の終末にいたるまで、日月の光のめぐみを受けない生き物(情非情)はいないという。よって日本においては、

この故に、いさなき、いさなみのみに、観音勢至の垂迹、日月として、世をでらします。又二菩薩の化をはとこして、九品蓮台をひらき給。末代なりといへとも、誰人か疑をなさん。

というのである。

日本では、観音と勢至の垂迹である伊弉諾と伊弉冉が日月として世を照らしているのである。また、両菩薩の利益である九品浄土の道も開かれているというのである。

耽空は、序文において日本国王（天皇）の仏法興隆を説明し、巻末においては日本国の開闢や日本国を造った二神と観音・勢至が一体であり、日本においても浄土往生の道が開かれていることを明らかにしているのである。このような主張が、かつて指摘したような信瑞の『広疑瑞決集』や親鸞門流の『神本地之事』、存覚の『諸神本懷集』という談義本に継承されて、在家止住の念仏者の神祇不拜へとつながるのである。⁽²⁾

法然の教えが日本における仏法と王法の興隆のためのものであり、したがって、その伝記を執筆することは仏法と王法の興隆のためにもなるのだと、耽空は主張しているのである。さらに、

仰て信すへしと思て、心のはやりのまゝに、七旬の老眼に悲涙を抑て泣、一人の同法をすゝめて後素をしるす。

後見留贈共期仏恵矣。嘉禎三年丁酉十一月廿五日筆功已畢。

と述べて、法然の絵巻制作の心中を告白するとともに、正月から十一月までかかって制作されたものであるとする。

耽空はまた、この自ら制作した伝記絵巻を披見の人は弥陀三尊の像を礼すこと。詞書を説明する人は大經（『無量寿經』）の文を読誦すること。身口意の行を願ひ、阿弥陀仏名を念じ、往生極楽の志に二心なく疑うことのないようにと述べている。最後に、自分が執筆して旨趣を草し、観空が画図を模したものであり、願わくは共に九品蓮台の果を証したいものだとして、耽空とともに署判している。その後には和歌二首が記されているので、この識語も絵解きのさいに読まれることを意識して執筆されたものである。

以上のように、『伝法絵流通』上巻（『善導寺本』巻一・二）において、耽空が語る「法然の念仏」は、かつて高木豊氏が指摘されたような栄西の『興禅護国論』における主張、すなわち、

「この宗は戒をもつて初とし、禪をもつて究とす。もし破壊のものも悔心もて惡を止めば、すなわち禪人と号せん」「この宗は仏戒をもつて師とす」「戒律はこれ令法久住の法なり。今この禪宗は戒律をもつて宗とす」

といつて以戒為初・以持戒為師・以持戒為宗であることを強調したものと共通するものがある。榮西は上述したように『善導寺本』において法然の同行だとされる重源のあと、建永二年（一二〇六）東大寺大勸進職となっている。榮西は戒律を為初・為先・為師・為宗とすることで、公家政權とも武家政權とも結びつき日本国における仏法王法の興隆につとめている。⁵³

「法然の念仏」も、貞慶が「興福寺奏状」において指摘したような九箇条の失は、耽空が大原談義に貞慶以下の南北の名匠を出席させているように、布教課題としてはすべて克服する努力がなされていたのである。奏状の第九「国土乱る失」において、諸宗は皆念仏を信じて異心なしと雖も、専修は深く諸宗を嫌うとして、貞慶が「願うところは、ただ諸宗と念仏とあたかも乳水のごとく乾坤に均しからんことなり」と記載しているような要求は、すでに取り入れられているのである。⁵⁴ よつて、高木氏が指摘されたような、榮西の主張と行動をも参考にして、「法然の念仏」の興隆を検討し、念仏教団が成立し隆盛する背景を探る必要があるのである。このような観点からも耽空の『伝法絵流通』は貴重な法然の伝記絵巻といえる。

三 『伝法絵流通』下巻

(一) 『善導寺本』卷三

① 下巻の序文

『善導寺本』の卷三には「伝法絵流通 三卷」との内題がある。『国華本』の残欠一には「法然上人伝法絵流通下」とみえる。両本ともに「上人、入学のはしめ……」とはじまるので『善導寺本』卷三の冒頭は下巻序文として読

むことができる。

上人、入学のはしめ、諸一切種諸冥滅、拔衆生出生死泥とうけたまいしより、ふかく此理を信して化度の心さしあさからずして、諸宗ハ学するにしかかふて開悟、万法ハ行することに証得し給うさま、あら／＼後素を東界にとゝめて前途を西刹に望あまり、世のそしりを知らず、訛謬あらはかきつくるハせたまへ。人のあさけりをわする、あやまちあらはすて給へ。

と記載している。『国華本』も漢字・仮名の相違はあるが、ほぼ同文である。

耽空は、上巻である巻一・巻二において、法然が諸宗は学ぶにしたがつて開悟し、万法は行ずることに証得したありさまを絵巻にしたのは、浄土往生の望みのためである。世の批判をかえりみずに執筆したものであるから、間違いがあれば訂正し、誤りがあるのなら捨ててほしいという。

そして、門弟らが不思議を示したために、顕密の両宗、南北の衆徒の訴えにより、咎が本師法然にかけられ遠流に処せられたのだという。およそ往生極楽の道はまちまちであり、名号の一門を開いて、代にしたがいてひろめ、機にしたがつて授けるなかに、邪義をかまえて偽って師説と号する人たちがあらわれたために、本師法然一人が罪として流されたのであるというのである。

凡往生極楽のみちまち／＼なるあひた、名号の一門く開て、代にしたかふてひろめ、機にかふらしめてさつくる中に、みつから邪儀をかまへて、偽て師説と号する刻、予一身につみなか(さ)れて、遙ニ万里のなみになかれにけらし。

耽空は、法然の流罪が、門弟たちの師説の理解不足や曲解による念仏教化のためであり、けっして法然自身の活動に起因するものではないと説明している。上巻において、「弟子」と記載するのは能信だけであった(聖光は追補)。門下としても天台僧しか登場させず、七箇条起請文の省略した記載や『選撰集』の門弟への下付を記さず、門弟の教

化活動を掲載しないのは、山門の念仏僧である就空にとっては、法然の門下と号する念仏上人たちの言動には容認しがたいものがあつたためであろう。また、山門の円戒相承した念戒一致の法然門下にたいする批判や弾圧にたいしては不当なものと考えていたのであろう。

② 法然の流罪と教化

『善導寺本』巻三の絵画は第四十「力者小松殿へ参勤の図」よりはじまり、第四十八「吉水の庵室の図」で終わる。建永二年（一二〇七）二月から三月十六日に土佐国に出発するまでのあいだ、法然は月輪禪定殿下（兼実）の指示で法性寺の小御堂に逗留した。信濃国角張成阿弥陀仏が力者の頭領であつた（第四十「力者小松殿へ参勤の図」）。

また、漢の一行阿闍梨、日本には役の行者の例でも明らかのように謫所は権化の住むところだといひ、震旦には白楽天、我朝には菅丞相をあげる。法然の興を昇く成阿弥陀仏については、

王家を守（る）多田の苗裔、法家ニ始て入る。朝敵を拉ク伊州の玄孫なれとも、本師上人に従て奴と也、僕となれり。

と説明している。「王家を守る」「朝敵を拉ク」武士が、法然の「奴と也、僕となれり」といふ。就空は力者の頭領を「弟子」とか「門弟」としてはみとめない。

法然が都を旅立つた同じ日に大納言律師公全も西国に流された。公全の流罪の理由についての記載はない。律師の船が先に出たけれども、法然の船が降ることを聞いたので、律師はしばらく待つことにした。律師は法然の船にみづから乗り込み、上人の膝に頭をかたぶけて、天に響くような声で泣いた。しかし、法然は涙をまながさずただ念仏をもうしていたという。律師の船からは早く戻るようにと催促があつたので、名残りを惜しみながら戻つたとのことである（第四十一「遠流船出の図」）。このような法然と公全との親密な交流を記すのは、巻四における嵯峨納骨の説明

の伏線としてである。

ついで室泊の遊女の結縁を記すが、天王寺別当行尊の拝堂めぐりのさいの江口・神崎の遊女の結縁という先例を紹介している（第四十二「室泊遊女結縁の図」）。

三月二十六日に讃岐国塩飽島の地頭駿河権守高階保遠入道西仁の館に寄宿したことを記す。法然は西仁にたいしては、念仏に縁なき衆生は謗り嘲るが「末の世まで人々をこしらえて念仏をすすめ給へ」と述べたという（第四十三「西仁が館の饗応の図」）。

このあと四国にわたった法然は、弘法大師が父のため建立したという善通寺は、観音靈驗の地であり一仏浄土の縁となることより、「今度のよろこひ是にあり」と語り参詣している（第四十四「善通寺参詣の図」）。ついで八月日付の召還の院宣を記載する。文面のみで、その解説はされていないので、前後の事情はわからない（第四十五「恩免の図」）。

この流罪の道すがらの、法然の念仏教化は後の絵巻においては、法然の遮民教化を説明する段となっていて、ただいに増補充実されていく。しかし『善導寺本』では、法然が直接念仏の教えを説いたことを記す言葉は地頭西仁にたいしてだけなのである。

『国華本』の絵画では、法然が遊女、西仁らに、あたかも語りかけているように描かれている。

また、『善導寺本』『国華本』の文章（詞書）だけを読んでいると、大納言律師が法然と別れを惜しみ、天王寺別当の拝堂めぐりが登場し、在地領主である地頭の饗応があり、弘法大師の遺跡寺院への参詣があったりして、法然の念仏教化が、門弟たちの「専修念仏」の布教とは、あきらかに違ったものとして語られている。諸宗や在地の支配者との協調がはかられているのである。

③ 勝尾寺滞在と帰洛

法然は、勝如上人の往生の地である勝尾山にしばらく滞在することになった。花夷の男女道俗貴賤が参り集まつてきた（第四十六「勝尾山隠棲の図」）。

法然が勝尾寺における恒例の引声念仏を聴聞しているとき、衣装が必要なことを知り「弟子の信空上人」に装束勸進のよしを命じた。信空は法服一襲十五具持参した。住侶等は感激のあまり七日七夜の念仏を勤行した。ここで信空が登場するのであるが、『善導寺本』においては二度目の登場である。巻二における法然の説戒や念仏教化の場には描かれていない。就空は、信空をはかの法然の門弟とは違う立場の弟子として描いている。

次に『善導寺本』では欠落しているが、『国華本』には「一切経施入の図」があり、絵画を説明して当山には一切経がないので法然が所持している一切経を施入したという。就空の原本にはあつたと推察できる。

『善導寺本』にもどる。法印聖覚が（一切経を）唱導して開題讃嘆した。聖覚の唱導は次のようなものであつた。それ八万の法蔵は八万の衆類を導き、一実真如は一向専称をあらわす。用明天皇の儲君は南無仏と唱えた。その名をあらわしていないがこれは弥陀の名号である。慈覚大師の念仏の伝統は經文を引き宝池の波に和している。しかし、空也上人の念仏は音をたてるが徳を知らない。恵信僧都の『往生要集』には二つの道をつくるので一心のものは迷つてしまふ。永観律師の『往生講式』には七門を開いて一篇にはつかない。良忍上人の融通念仏は神祇冥道には勧めたが、凡夫の望にはうといものであるという。

このように、先人の勧める念仏の不足を述べて、法然の念仏のすばらしさをつぎのように讃嘆するのである。

ここに我が大師法主上人が、行年四十三歳より念仏門に入られ、あまねく弘められたので、天子・月卿・皇后・傾城以下、農夫・織女などすべての人たちが、阿弥陀仏をあがめないことを瑕瑾とし、数珠をくらないことを恥るようになったのだと語り、

我等が欣求せざるハ其国のうれへなり。国のにきはい、仏のたのしみ、念仏を以て基とし、人のねかい、我かのそミ、念仏をもてさきとし……。

と唱導している。

聖覚が「鼻をかみてこえむせひ、舌をまきてとこほるきさみ」、勝尾寺の法主は涙を流し、聴衆は袖をしぼり、悉く念仏門になびき、法然上人のすすめになつたという。また勝尾寺一山の住侶八十四人は面々に上人の興隆を喜んでと記している。

耽空は、法然が一切経を所持していたとし、それを勝尾寺に施入したとして、法印聖覚に法然の念仏教化を讃嘆させている。このことは、聖覚の天台宗における立場や鎌倉幕府との関係を考慮して理解する必要がある。耽空は聖覚の言葉をかりることで、法然流罪の途次で念仏教化したことや諸国における人びとの念仏信仰を、山門が間違つたものとして、その活動を否定してはいないということを、ここで説明しているのである。^(四)

ようするに、法然の門下と称する念仏上人が勧める法然の念仏は彈圧の対象となつたが、法然自身の勧める念仏は、慈覚大師の念仏の伝統を引くものであり、なんら非難されるものではないことを、聖覚の唱導をとおして主張しているのである。

やがて龍顔（後鳥羽上皇）、逆鱗のいましめをやめられたので、鳥頭変毛の宣下を蒙り京都へ帰ることが許された。都では吉水の前僧正慈鎮(四)の御沙汰として、大谷の禪房に居住することになつた（第四十七「帰洛の図」）。権中納言藤原光親の奉行として帰京のよしを仰せくだされたときには、もとよりこのように侍ると思われなかつたとし、第四十八「吉水庵室に入る図」で、法然を迎える慈鎮が描かれている。法然は前の天台座主に迎えられたのである。

法然は、兼実の法性寺から流罪の旅にでて、帰洛にさいしては弟の慈円の世話になるのである。見方によっては、『善導寺本』巻三は兼実・慈円兄弟と法然との親しい関係を強調している段でもあるといえよう。嘉禎三年といえ

九条道家の子頼経が將軍である。鎌倉幕府と九条家との關係をも考慮に入れて読む必要がある。

(一) 『善導寺本』卷四

① 法然と女人往生

『善導寺本』卷四は、法然の女人にたいする念仏往生談にはじまり、臨終往生、大谷廟堂の破却、公全による小倉山鴈塔への納骨まで述べている。絵画は第四十九「女人、法談聴聞の図」にはじまり、第六十二「小倉山鴈塔の図」で終わる。

ある時に、宮仕えしているとみられる尼女房たちが、あまた法然のもとへ参じた。罪深い我らのごとき五障の女人も、念仏を申したならば、極楽へ往生できるといふのは本当か、くわしく聴聞したいとやってきたのである。

法然は、女性は罪深いゆえに一切の処から嫌われていることを説明し、一切の女人は、弥陀の名号願力によらなければ女身を転じることができない。弥陀の本願以外には「最後臨終に男子の身となり」往生することができないことを示した。よってその座にいた尼女房たちは「念仏門」に入り、このことを伝え聞いた女房たちも念仏にはげむようになったと述べている(第四十九「女人、法談聴聞の図」)。

都における法然の宗教活動は、卷二に叙述されていたのであるが、なぜ卷二においてではなく、このように切離して、流罪から帰洛した卷四の冒頭において詳しく紹介されているのであろうか。

『善導寺本』においては、耽空が、

上人の仰けるは、弥陀の本願を憑むより外ニハ、女人更に往生の望をとくへからず。

という法然自身の言葉を引いて念仏往生について語っている。ここでは、女性の往生については、諸仏の浄土から嫌われ「此日本国ニたにも貴くや(ん)ことなき靈地靈驗の砌にハ皆悉く嫌たり」ということを解き明かすことにより、

念仏往生をすすめている。関東での布教において、武家の女性への念仏教化に力を入れていたのかをうかがうことができる段である。

しかし、この女人往生についての段は『国華本』『高田本』『弘願本』『琳阿本』にはみえないのである。『善導寺本』ともっとも共通する『国華本』や『高田本』を検討してみても、絵巻としての展開のうえからも不自然である。なによりも、耽空は法然の弟子が師の念仏教義を語ることを否定しているのであり、自身もそのことを堅くまもっている。詳細な検討はあらためてするが、のちに追加された場面である可能性があることを指摘しておきたい。

② 法然の往生

つぎの年（建暦二年）正月二日より老病という。が、前段が「ある時」で始るので、この段の「つぎの年」がよくわからない。この段は絵画で説明する段である（第五十「病床御物語の図」）。絵画の構図は蓮のうえに法然、その後一人の僧、蓮の外に三名の僧、それと向いあつて四名の僧、少し離れて尼僧を描いている。

尼僧については絵画上方に「仁和寺に侍ける尼、上人往生の夢に驚て、参給ける」との説明文がある。上人の病について、人びとが「御往生（の）実否（は）如何」と問いかけると。法然は、

答云、我本、天竺国に在るとき衆僧に交て頭陀を行しき。今日本にして天台宗ニ入つかゝる事ニあへり。抑今度の往生ハ一切衆生結縁のため也。我本居せしところなれば、たゞ人を引接せしと思。

と答えたとする。

正月十一日になると、法然は高声念仏をすすめると述べて、「此仏を恭敬し、名号を唱人、一人も不空」といい阿弥陀仏の功德を種々に讃嘆したので「弟子等不拜之哉云々」と記している。二十日ころより上人の念仏は高声ねんごるなものとなり、助音の人たちの念仏はほのかなものとなった。ある雲客（藤原兼隆）は七八年以前に上人往生の夕



図2 国華本『伝法絵』残欠「病床御物語の図」

べには光明遍照の偈を唱えよとの夢告を蒙っていたので、二十四日より二十五日正午にいたるまで、念仏高声にして夢告のように偈文を誦した。就空は観音菩薩の照臨、勢至菩薩の迎接を記し、法然の臨終の様子を、

慈覚大師附属の法衣を著して、頭北面西にして、念仏数遍唱給の後、一息とまるといへば、両眼瞬かことし。手足ひへたりといへとも、唇舌をうこかす事数遍也。行年四十三より、毎日七万遍にて、無退転云々。

光明遍照十方世界 念仏衆生攝取不捨 南無阿弥陀仏々々々々。

と記している。

巻二において、無品親王静忠(恵)の臨終の次第に、往生極楽の御願、御念仏にはしかずとして『観経』の撰益文を引いた叙述と同じである。

法然が慈覚大師の袈裟を着して往生した。ということ、法然が天台僧として往生したということ象徴している。そして、四十三歳より毎日七万遍の念仏を唱えたことも記しているので、その念仏も天台宗の念仏であっ



図3 国華本『伝法絵』残欠「御往生の図」

たということを、耽空はここで再び強調しているのである。

第五十一「御往生の図」には、兼日に往生の告を蒙る人びととして、つぎの人びとの名前を記載している。

前権右（大）弁藤原兼隆朝臣／権律師隆寛／白河准后宮／
別当入道／尼念阿弥陀仏／坂東尼／一切経谷住僧大進公／
陪從信賢／祇陀林ノ経師／薄師真清。水尾山権夫紫雲見
之。

③ 『国華本』「病床御物語の図」「御往生の図」

『善導寺本』の「病床御物語の図」には僧侶の名前は記載されていないが、『国華本』には記載されているので、『国華本』の絵画を紹介したい。

蓮には五名の僧が、弟子たちと向い合う形で対座している（図2参照）。蓮の上方に法然、その後信空。蓮の下方に三名の僧がいる。その一番後の僧は権律師隆寛である。隆寛の後の蓮の外に安居院聖寛がいる。蓮の下方の外に熊替入道（但し承元二年（一一二〇）没）がいる。これら七名の僧と向い合っている四名の僧を描いている。記録によれば、一番前座に勢観房・親守大和守見仏・右京権大夫隆信沙弥戒心（但し元久二年（一一二〇）

二〇五〽没）、少し離れて空阿がいる。『善導寺本』にも火鉢が描かれているが、『国華本』ではちょうど絵画の中央に描かれていて、法然・信空たちと弟子とを隔てている。

すなわち、信空・隆寛・聖覚と弟子たち（勢観房・親守大和守見仏・右京権大夫隆信沙弥戒心・空阿）とを明確に区別している。この絵画からは、随時の弟子は信空、法然の同門が権律師隆寛、法然・信空・隆寛のよき理解者として安居院聖覚を描いているように読み取れる。また、法然の弟子として勢観房・親守大和守見仏・右京権大夫隆信沙弥戒心・空阿の四名を描くが、いかにも年の若い青年僧として描いている。

ところで、熊谷入道は蓮の外にいる。この弟子四名とは対座していて、絵画を見る限りにおいては法然の弟子とは解釈できないのではないだろうか。また尼僧は描かれていないが、『国華本』の絵画上方にも「仁和寺に侍ける尼、上人の往生の夢に驚て、参し侍りける」との説明文がある。『国華本』において、尼僧の絵画が省略されたことがある。

『国華本』の「御往生の図」の構図は『善導寺本』とは異なる（図3参照）。『病床御物語の図』と同様に、蓮のうえに横たわる法然、その頭の後に信空聖人、足もとに定生坊を描いている。『国華本』では「上人」を「聖人」と記す。信空と定生坊の二人が随時の弟子である。蓮の外に弟子に向い合って法印聖覚・権律師隆寛・証空聖人・熊替がいる。弟子としては勢観房、大和入道見仏・空阿が描かれている。弟子の横に前右大弁藤原兼隆と兵部卿（平）基親朝臣がいる。年若い勢観房が蓮の縁に近づき泣いているのが印象的である。兼日に往生の告を蒙る人びとの記載は、『善導寺本』と同じ人物であり、記載の順序も同じである。⁶⁹

この『国華本』の絵画の説明としては、『明義進修集』卷三「第七安居院法印聖覚」において、信瑞が法然は、吾が後に念仏往生の義すくにいはむする人は聖覚と隆寛となりと述べて、正しい継承者だと常に言っていたとすること。親鸞が東国の門弟のために聖覚の『唯信鈔』や隆寛の『自力他力事』『一念多念分別事』を書写し、注釈を加えたこ

と。光明本尊や初期真宗の連坐像に信空と聖覚が描かれていることなどと密接な関係がある。

④ 法然の中陰法要

航空は、門弟たちが「世の傍例」にまかせて「遺骨」を納め中陰をおくったとして、わざわざ世間の慣例にもとづいた中陰の法要であったと述べていることに興味をひかれる。しかし、第五十九「墳墓発掘の図」には遺体が描かれていて矛盾している。

初七日より七七日までの七度の法要を勤仕したのは、どのような門弟たちなのだろうか。

初七日の導師は信蓮房とし、第五十二「初七日法要の図」では不動尊の画像を供養している。大宮入道内大臣（藤原実宗）家の「先師在生の昔、弟子遁朝の夕べに十重禁戒を受けた」という諷誦文を、前周防守源盛親が誦している。

二七日・三七日・四七日・五七日・六七日については絵画はなく文章（詞書）だけである。

二七日は普賢菩薩とみえるだけで導師・願主についての記載はない。ここでは八幡宮の御体は法然上人であることが明らかにされている。

二月十三日、別当入道（実名不知とする）が、上人の御葬送が清水寺の塔に入ったのを夢に見た。また、その一兩日あとに、葬送に会することができなかったことは遺憾なことであるので、御葬の地へ出かけよとの夢をみた。別当入道が葬地にでかけると、八幡宮の戸が開くように思われたので「八幡宮の御体也」というと、隣人はこれこそ「上人の御体」だと申したという。

航空は、法然と八幡宮との関係を説明するのに、大江匡房の『続本朝往生伝』からの引用と思われる次のような話を掲載している。八幡大菩薩の本地を真道上人が祈請したら、大菩薩は「昔（縁）於靈鷲山説妙法（蓮）花経、今在正宮中示現大菩薩」と示された。また行教和尚のたもとは阿弥陀如来が遷られた。垂迹をいえば昔は鷹と現れ、今は鳩と

現じている。鷹・鳩変じやすく、釈迦・弥陀もこのようなもので、娑婆にては釈尊、安養にしては弥陀、ただ一体の分身であるので、疑うことはないという。⁽⁸⁷⁾

三七日の導師は住信房である。「末弟耽空」誦經物を捧ぐとして、本伝記の作者が登場する。耽空は王羲之の摺本を一紙捧げたとする。羲之をかけた和歌を掲載している。

にしへ義之⁽⁸⁸⁾へきみちのしるへせよ　むかしもりのあととありけりへ安息国之鳥故云々

四七日の導師は法蓮房信空で、願文は弟子良清である。五七日の導師は権律師隆寛、願文は弟子源智である。六七日の導師は法印大僧都聖覚、誦誦文は慈鎮で自筆とする。慈鎮の誦誦文には、慈鎮と法然との交流をして、「仏子、上人存日の間、時に法文を談じ常に唱道を用ちふ。結縁の思い浅からず。済度の願い深きか如し」といい、「しかれはすなわち、幽霊、彼の平生の願に答え、必ず上品の蓮台に往生す。仏子、この円実の廻願によって、早く最初の引接を得るなり」(原漢文)として、慈鎮が法然の引接による往生を願ったとするのである。

耽空は七七日の法要については詳しく絵画と詞書で説明している。第五十三「七七日法要の図」では、導師の三井僧正公胤が、別当法印大和尚位増円が奉じた両界曼陀羅阿弥陀如来を供養している。公胤が導師を勤めたことについては、「念仏の破文」を作成し種々の難をもって法然を誹謗したが、一いち覆されて反対に帰依し、その罪障懺悔のため中陰の唱導を望んだことによるとしている。

信空の願文を載せて、信空は先師二十五歳、弟子信空十二歳のとき師資の契約を結び、久しく五十年におよぶ。比叡山黒谷の庵より、白河の禅房にいたるまでの「撫育の恩」といい「提撕の志」についての報謝の思いは、昊天に極まりないものがある。よって信空は「阿弥陀来迎図」と「金胎両部の種字」を安置するとともに、『法華経』と『金光明経』を書写して開眼・開題して上人を供養したとしている。

それから五年をへた建保四年(一二二六)四月二十六日に公胤は法然の夢をみた。夢の中で、法然は公胤に、

源空の孝養のために公胤よく説法をす。感語尽くすへからず、臨終に先ず迎接せん。源空の本地身は大勢至菩薩。衆生を化せんかための故に、此界に度たひ来るなり（原漢文）。

と告げたという（第五十四「公胤夢想の図」）。公胤は、その年の閏六月二十日紫雲たなびくなか往生をとげたのであった（第五十五「紫雲たなびく図」）。

中陰の仏事の絵解きにおいては、法然が阿弥陀仏の化身であり、八幡大菩薩とは本地垂迹関係にあるとくこと。また、前段において登場させた聖覚・隆寛・公胤を中陰供養の導師をしたことで、法然との関係を強調するのである。鶴岡八幡宮寺の別当や供僧は寺門出身の僧が主流であったことなどを考えあわすと、鎌倉での絵解きを前提にした中陰法要の記載でもあるといえよう。

⑤ 航空と大谷墓所

つづいての、航空が元仁元年（一二二四）の正月大谷の修正会に詣うで、梵唄のあと念仏（衆）に交わったことから巻末までは、航空の直接見聞した法然の墓所の移転の経過と法然追慕の記事である。

『国華本』の法然臨終の絵画で法然の足もとにいた定生房が、上人亡きあとの大谷の禅房の主となっていたが、この年の八月三日に往生した。五日には信空によって定生房の後継者に定仏が命ぜられたという。このことより、航空は大谷禅房の管理は信空によってなされていたと主張している。

注目したいのは、航空自身が定生房の七七日の中陰法要の導師となり、『法華経』・『金光明経』・浄土三部経を開題供養したと記していることである。『選択集』を付与された隆寛が嘉禄三年（一二二七）に、信空が翌安貞二年に亡くなっている。『善導寺本』をここまで聴聞してくると、嘉禎三年（一二三七）の頃に法然の伝記執筆者としてもっともふさわしい弟子は、信空や大谷禅房の後継者である定仏や定生と親交の深かった航空以外にないことが理解で

きる。『法華經』・『金光明經』を供養したということは、大谷廟堂においては鎮護国家も祈られていたのである。

ついで上人の廟堂が描かれている(第五十六「大谷本廟の図」)。延暦寺梨本と青蓮院の両門跡は四明一山の貫主に備り、三千の頭領となる賢哲であるが、平生の薙には法然上人をもつて念仏の先達とし、或いは存没の庭に諷誦を捧げて往生の後会を契っている。院宮宮腹よりはじめ、都鄙の貴賤が群がり参集している法然の墳墓を破却したことを「本山のため、いかなるあやまりかきこえけん」と批判している。

後堀川院の御宇、天台座主円基のとき、嘉祿三年(一二二七)六月二十一日に山門の所司が専当を使わして大谷廟堂を破却しようとした。このとき東宮入道藤原盛政が、是非に随って左右すべきことだとして、関東御下知の趣だと制止を加えたが、とどまらなかった(第五十七「廟堂破却の図」)。盛政は、

医王山王もきこし召せ。念佛守護の鎮守赤山大明神ニかはり奉りて、魔縁打ちほらい侍らん。偽て四明三千の御使と号して、媚て四魔三障のむらかり来か。

といい、善惡不二の邪正一如のおきては、山門の使いならば聞き知っているであらう。頭には関東御家人は弓箭につかえて狼籍をふせぐべき身であり、冥には西土の念仏者として魔軍をいかでかはらんと述べて衆徒を撃退したという(第五十八「山徒撃退の図」)。

医王とは延暦寺根本中堂の本尊薬師如来のことであり、山王はその垂迹である日吉山王権現のことである。赤山明神(唐名は泰山府君)は中国登州の赤山法華堂の山神で、慈覺大師円仁が入唐求法のみぎりこの神の冥助を蒙り、帰国のさいの航海の安全を守護した神である。円仁は帰国後比叡山の横川に祀ったが、弟子の天台座主安慧が師の遺言により仁和四年(八八八)西坂本口に赤山禅院を建立し遷した。東坂本の日吉山王社とともに比叡山の地主神、天台一宗の護法神として崇敬されている。『源平盛衰記』巻十「赤山大明神の事」には、円仁帰朝の船上に赤衣に白羽の矢を負い現じて大師を守護したといい、山門(比叡山)と念仏守護とについて、

赤山大明神と申すは、慈覚大師渡唐の時、清涼山の引声の念仏を伝え給ひしに、この念仏を守護せんとて、大師に芳契をなし給ひ、忽ち異朝の雲を出でて、まさに叡山の月に住み給ふ。されば大師帰朝の時、悪風に逢ひてその舟あやふかれば、本山の三宝を念じ給ひけるに、不動・毘沙門は鱸・舳に現じ給へり。この明神は又赤衣に白羽の矢負ひつつ、舟の上に現じ給ひつつ、大師を守護せられけり。「山王は東の麓を守り給へ。我は西の麓に侍らん。閑なる所を好むなり」とぞ仰せられける。

と述べている。⁵⁸引声念仏は一種の曲調をつけて阿弥陀仏の名号を唱詠する法であるが、慈覚大師が五台山で学び仁寿元年（八五一）比叡山常行三昧堂ではじめて修した念仏である。赤山明神は比叡山、天台宗の念仏を守護するために鎮座していると読める。

慈覚大師とその念仏を守護した赤山明神が、慈覚大師の袈裟を着して往生した法然とその念仏を守護しないはずがないではないかと、耽空は主張しているのである。

⑥ 関東御家人の警固

上人の墳墓はこの夜のうちに改葬された。宇都宮入道頼綱は遁世していたが、守護のため五六百騎の兵士を催し宿直した。頼綱の「昔ハ死生不知の誉をほとこさんと思しかとも、今は往生極楽の名をとゝめんと願す」との決意を掲載している（第五十九「墳墓発掘の図」）。

耽空はここで、頼綱の祖父朝綱が東大寺大仏の脇土観世音菩薩を造立しかたみを東海に留めたことを紹介し、孫の頼綱法師が西方界の教主阿弥陀如来に帰依し魂を西刹にゆだねているとして、関東武士の祖父と孫の仏法との結縁の深いことをとくのである。

法然の遺体が武家に警固されながら洛中を通るのを見た人びとは、面々に涙を流し各おのに袖をしぼった。六月二

十三日は炎天で、門々には水が設けられたので、警固のものは戸々に唇をうるおすことができた。航空は「これひとえに但念仏行人、一向欣求のともから総て一千余騎」と記している。

宇都宮朝綱（一一二二～一二〇四）はもと後白河院の北面の武士で平家に仕えていたが頼朝挙兵をしり参上した。『吾妻鏡』によれば、宇都宮社務職を安堵されたが、功が募り重ねての新恩として元暦元年（一一八四）五月二十四日には伊賀壬生野郷の地頭職を拝領している。十一月十四日には頼朝は朝綱に西国に所領を宛賜うよう義経に沙汰している。また、元暦二年七月七日には朝綱のもとに平清盛の腹心であった平貞能が山林に隠居し往生の素懐をとげたいと通れてきた。朝綱は、その後頼朝の命により貞能を召し預っている。東大寺の脇士観世音菩薩を造立したというのは、頼朝が建久五年（一一九四）六月二十八日に東大寺の二菩薩・四天王像等を御家人に充て分担させたさいに、観音菩薩の造像を命ぜられたことを述べたものである。朝綱はこの年の五月二十日下野国司に公田掠領を訴えられていて、七月二十日に配流の官符が下ったために、朝綱は土佐国、孫の頼綱は豊後国に配流がきまった。日野重基は朝綱引汲の科により洛中を追放になっている。この配流を頼朝はしきりに嘆き、結城朝光に訪わせた『吾妻鏡』には記載されている。

朝綱の孫である宇都宮頼綱（一一七二～一二五九）は北条時政の娘婿である。元久二年（一二〇五）の北条時政による牧氏陰謀事件で北条政子に討手をむけられ、一族郎従六十余人とともに髻を切り、鎌倉に出向きその髻を獻じて許された。実信房蓮生と号したが、承久・嘉禎年間（一二一九～三八）ごろには伊予の守護職に任ぜられている。和歌に秀で藤原定家と親交があり、嫡子為家に娘を嫁がせている。

このように朝綱と頼綱は単なる関東武士ではないのである。右大将家や執権北条氏と関係の深い有力な関東御家人なのである。

東大寺大仏の脇士の観音像を造立し仏法王法の興隆を願った朝綱の孫頼綱が、法然の念仏に帰依し、遺体を警固し

たことを絵解きすることは、関東における布教伝道において大きな成果をもたらすものであったことは容易に想像できる。法然の念仏を守護したのは、関東御家人であることが聴衆に強く印象づけられたことであろう。

第六十「遺体護衛奉送の図」があり、つぎに東行西行したあと火葬にすると、奇瑞のあったことを記す。靈雲が空にみち異香が庭に香った。それからのちは、

模真影以修月忌、設礼奠以行遠忌、門々戸々誰^レ家にか不惜三五夜中光を、国々處々何隅にか不望六八弘誓之雲、哉、然間遺弟之諱、一念多念はるかに統末法万年之命、貝葉之種、六時別時、鎮研本願三輩之心

と各地において法然の真影を本尊として月忌・遠忌が勤修されるようになるとともに、遺弟たちの間において一念・多念の論争もでてきたという（第六十一「茶毘の図」）。これは各地において知恩講のさかんとなったことを述べたものである。⁽⁶⁰⁾

⑦ 嵯峨納骨

茶毘にふされた法然上人の遺骨が嵯峨釈迦堂の地に納められたことについて、耽空は、

上人、求法修行のはしめ、先當伽藍に詣す。定て御起請旨侍るか。釈迦・弥陀ちぎりふかく、此土、他^(土)と、縁あさからずして、遂に遺骨を件地におさむ。

と述べ、釈迦堂については、もとは嵯峨天皇の別業棲霞館に阿弥陀堂が建立され、棲霞寺と号していたのを復興したものだ⁽⁶¹⁾と説明している。

実際の栖霞寺は源融の山莊棲霞観が没後、寺に改められたものである。東大寺僧齋然は愛宕山を中国の五台山になぞらえ、伽藍を建立し大清凉寺と号することを企てたが、長和五年（一〇一六）に亡くなり実現しなかった。弟子の盛算が寺内の釈迦堂に梅檀の釈迦如来像を奉安し、勅許をえて五台山清凉寺と号し華嚴宗の寺とした。以来釈迦信仰

の寺として興隆したが、建保六年（一二一八）に焼失した。この釈迦堂と阿弥陀堂を再建したのが、西隣の往生院に住していた念仏房である。念仏房は『善導寺本』巻一の大原談義では湛敷の隣に座していて、法然に近い山門の念仏者として描かれている。念仏房の勸進により、釈迦堂は貞応元年（一二二二）二月、阿弥陀堂は同三年二月以降に復興されている。貴賤の信仰を集めた清涼寺は室町時代には融通念仏の大道場となる。⁶⁰

『善導寺本』においては、嵯峨天皇という日本の国王の遺跡であり、釈迦・弥陀の両方の信仰の地に法然の遺骨が納められたと説明していることに意味がある。

釈空は、承久二年（一二二〇）四月八日より一夏九旬、持斎にて参籠し毎日七万遍の念仏を唱えたこと。翌三年も同じように参籠し毎日十万遍の念仏を唱えたと述べている。

『明月記』によれば、寛喜二年（一二三〇）四月十四日、一日嵯峨念仏があった。このとき、聖覚が招かれ善導像が供養されている。この嵯峨念仏は念仏房の病氣快復を願って往生院で修されたものとの指摘がある。同じ年の十月二日条によれば、藤原隆信（戒心）の子息信実が、後高倉院の皇子で貞応二年に天台座主となり、嘉祿三年（一二二七）に再任された二品親王（尊性）の仰せにより、嵯峨において善導御影を写している。この善導像は往生院の像であったと考えられている。釈空と念仏房、それに聖覚とは近い関係にある山門僧であることが理解できる。

ついで伝記最後の絵画として第六十二「小倉山鴈塔の図」がある。その説明文によれば、流罪の途次に船上で別離を惜しんだ公全を「弟子前権律師公全」と記し、公全が小倉山のふもとに法然の聖骨奉納のため宝塔一基を建立し念仏三昧を勤修し、阿波院（土御門上皇）の遺骨も納めたと記載している。

この最後の絵画の説明文に注目したい。阿波院は後鳥羽上皇の第一皇子である。父後鳥羽上皇の命により承元四年（一二二〇）守成親王（順徳天皇）に譲位し、父上皇の討幕計画に加わらなかったため、承久の乱後、後鳥羽・順徳の両院は配流されたが、北条義時は京都にとどめようとした。しかし土御門上皇は親兄弟の配流を悲しみ、みずから

も配流を望んだため、承久三年閏十月土佐に流された。『吾妻鏡』には上皇の土佐遷幸を、君臣たがいに悲涙に咽ぶと記し、「申し行なわずして日緒を遂ぐるのところ、こと叡慮より起こり、忽ち南海に幸す」と記している。このあと「天照大神は豊秋津洲の本土、皇帝の祖宗なり。しかるに八十五代の今に至りて、何が故に百皇鎮護の誓いを改め、三帝・兩親王の配流の恥辱を懐かしめたまふや」と述べている。幕府は貞応二年五月土御門上皇を阿波国に移し、嘉祿三年二月には守護小笠原長経に御所の造営を命じたが、上皇は寛喜三年阿波で没した。

配流先で亡くなった土御門上皇は、鎌倉幕府にとって仏法王法の興隆という面からしても、手厚く追善供養をすべき国王であった。その国王の遺骨が、公全により法然の遺骨とともに供養されていると絵解きすることは、関東における法然の念仏の布教においても、大きな効果があったことはいうまでもなからう。

⑧ 航空と法然の念仏

そして、上述した法然の生涯と念仏について次のように総括している。

およそ上人の徳行はあからさまであり諸宗にゆゆしき事にあるとして、三論の権律師寛雅、法相の贈僧正藏俊、天台の恵光房永弁の名をあげ、園城寺長吏僧正公胤はじめは謗じて後に上人に帰し、仁和寺法親王の御帰依がもっとも深かった。また上人は灯しきも無く室内を照し、南岳大師相承の慈覚大師の袈裟を相伝し、^(主)帝皇(高倉天皇)のために貴ばれ、法皇(後白河法皇)のために真影を図せられ、摂政(九条兼実)のために礼せられ、はたまた諸宮諸院に敬われ、数代の天台座主のために帰依せられたのである。師匠毎に還って弟子となり、知恵第一と称せられ、現身に光を放ち、没後も花夷の男女、家毎に遠忌・月忌・臨時の孝養をし、人毎に真影を留めて持念されているが、このような方が法然上人のほかにおられようかと絵巻聴聞の人にくったえるのである。

法然上人は皇后^(主)卿臣の家の生まれでもない。いやしくも遠国の土民の出身であるにもかかわらず、殿上に召され高

座に登られ、公請寛道の業に携わることなくして忝くも明王に伝え、しかも顔仰をこうむられたのである。これはひとえに慈覚大師の遺風、戒文につきたる袈裟付属のゆえであるとともに、善導和尚の余流、念仏に具する聖衆擁護の徳によるものだとして説明して、法然の伝記を終えている。

就空がくり返し『善導寺本』で法然の念仏として強調していることを整理しておく（数字は『善導寺本』の巻数）。

一、仏法王法の興隆と法然（「聖徳太子」「東大寺大仏」「高倉天皇の受戒」「後白河院と法然」）

◇「聖徳太子」 ①上巻序文、四天王寺の建立。①舍利を持つての誕生、仏の誕生、日本の正法のはじまり。

③勝尾寺の聖寛の唱導、太子の南無仏は弥陀の名号である。

◇「東大寺大仏」 ①上巻序文、聖武天皇の東大寺大仏鑄造。①重源の大原談義への参加。②東大寺大仏勧進と顕真・法然・重源。②法然の東大寺説法。④宇都宮朝綱の大仏脇士観音像の造立。

◇また、仏教經典の引用からも指摘できる。『善導寺本』では、念仏教義の引文では經典名を記載しない。經の名前の登場するのは『梵網經』『摩耶經』『華嚴經』『無量義經』『仁王般若經』『法華經』『金光明經』『大般若經』などであり、主要な護國經典がすべて登場している。いずれも否定的な引用はされていない。なかでも『法華經』は四度、『金光明經』は二度登場し、この二經により信空が法然の七七日を勤め、山門の衆徒に破却される上人の廟堂（大谷の禪房）を引継いだ定生房の七七日の追善供養を伝記作者就空が勤めたとするのは、大谷では修正会があり、その念仏衆に就空も交わったこととともに、きわめて興味深い。

一、法然が天台宗の僧であり、その念仏も山門の念仏である（「慈覚大師」「天台座主」「吉水の禪房」「大谷の廟堂」）。

◇「天台座主」 ①顕真、法然の念仏に帰依したのち座主となる。②七箇条の起請文、座主問状の図。③（前

天台座主）慈鎮の世話で大谷に居住。法然を迎える慈鎮の絵画。④慈鎮の法然六七日の諷誦文。法然の引接による往生を願う。⑤座主円基のときの廟堂破却は本山のあやまち。⑥耽空、数代の座主法然に帰依という。

一、法然の念仏の特色（「四十三歳」「七万遍の念仏」「善導大師」「諸宗通達」「釈迦・弥陀一体」）。

◇「四十三歳」①四十三歳より戒本を地体に毎日七万遍の念仏を唱え、門弟にも教えはじめた。③勝尾寺の聖覚の唱導で、行年四十三歳より念仏門に入り、念仏をひろめたという。④法然の臨終にさいし、慈覚大師の袈裟を着て、行年四十三より毎日七万遍の念仏に退転なしと語る。

◇「善導大師」①四十三歳からの念仏の説明で『観経疏』の「一向專念」を引く。①法然の現前に裳すそより下が阿弥陀如来の装束の善導が現われた。②重源が善導の真像を法然に伝える。④耽空、法然の念仏は善導和尚の余流と述べる。

◇「諸宗通達」①諸経諸讃多在弥陀の妙偈。①大原談義での諸宗に立入り深義論談。③下巻序文、上巻は諸宗を学するにしたがい開悟し、万法は行ずるごとに証得し給ふありさまを記したもの。④耽空、上人の徳行諸宗にゆゆしきことにある。

ところで、伊藤唯真氏は平経高の日記『平戸記』にみられる念仏信仰を考察されている。ちょうど耽空が法然伝を執筆するころの京都の貴族社会における念仏信仰をうかがうことができる。『善導寺本』に登場する念仏者との関係でその研究成果を紹介してみたい。

仁治元年（一二四〇）に経高を念仏生活に導いた彼の戒師は仕仏上人である。仕仏は東山一切経谷にその住房があった著名な戒師である。法然の往生の告をこうむった人びとのなかに、この一切経谷の住僧である大進公がいる。この仕仏上人は経高の依頼により「円頓戒祖師曼陀羅」の裏書と表紙銘を書いている。

経高には六人づつの月番制の恒例念仏衆十二人がいたが、能声の念仏者が選ばれたという。そのなかに、後白河院

の菩提回向のため住蓮・安樂とともに「六時礼讃」をつとめた大和入道見仏と、信空により元仁元年（一二二四）年大谷禅房の後継者に命ぜられた定仏がいる。また、経高は仁治三年五月五日、恒例念仏衆に交わっていた見仏の百カ日にあたることより、念仏衆による一夜念仏が企画されたが、僧衆に食を施している。

経高は寛元二年三月十四日、この日は善導和尚御忌日との説があるので、持仏堂に善導大師の御影をかけて、寅刻より一昼夜念仏を修している。念仏は家中の輩が結番して勤めたが、経高自身は巳時に結番している。経高は大師御忌日は二十七日と考えていたので、二十七日にも修すべきかと記している。この十四日説は、割り注によれば故空阿弥陀仏の説だという。この空阿弥陀仏は『国華本』の上人病床の図や往生の図に門弟の一人として描かれている空阿と考えられるとのことである。

『国華本』の往生の図において隆寛の隣に描かれている証空が雲戒の老母に授戒し、この老母の臨終の善知識は嵯峨の念仏房がつとめた。臨終の善知識を念仏房がつとめたのは、生前の契約とのことで経高が遣わしたものである。中野氏は経高と念仏房とが深い関係にあったことを指摘されているが、『平戸記』には、念仏房が九条道家に授戒した見聞記事もある。

伊藤氏も指摘されているように、経高の念仏はいわゆる余行・余仏を放擲しての念仏ではない。諸仏の講会も催すし釈迦念仏も唱えている。当時の他の多くの貴族と同様にいわゆる天台流の浄土願生者とみられるという。

そのような経高の念仏信仰と交流をもっていた山門の念仏僧を、法然の門流として強調しているのが耽空の『伝法絵流通』であるといえる。

法然没後、貴族社会に出入りしていた法然門下の能声の山門の念仏僧と、法然門下ではないが釈迦・弥陀・善導を合せた念仏者である山門の念仏房や仕戒上人、それに天下の唱導家である聖覚とは親しい交流があったことは確かな事実であろう。したがって『伝法絵流通』の作者である耽空（伝記作者）もそのような念仏僧と交流のあった法然の

門弟であることはほぼまちがいないであろう。

以上のことより、『善導寺本』において伝記作者が説いている「法然の念仏」は、嘉禎三年当時の京都の貴族社会の念仏信仰を背景にしていると推測することができるのである。

ま と め——下巻の識語——

下巻の識語は次のようなものである。

上件巨細、将来までとゝめんと念仏の処、古廟転倒の日、無懺の思いふかくして、生死をいとひ、新発意の沙門、有縁のもよほすところ、互いに言語をましへ、共に画図の思案をめくられて、後見のあさけりを忘れて、前途を彼界におくる。

(ママ) 嘉禎三年丁酉五月に始之、⁽⁶⁵⁾ 同十一月廿五日、於相嘉鎌倉八幡宮本社之辺図之、

鎮西筑前国之住人左兵衛尉源光忠 法名観空
行年三十三云々

願主沙門耽空 六十九

人ことにおしむけしきやみえぬらん 山のこゝろにはれぬ月かけ (以下和歌二首)

抑この絵ハふかき心さしあり。特留此経の傍に、為挿先師之遺徳、止住百歳之間、欲備後代之美談者也、……知見無誤者、早出有為家、本誓有憑速入無為宮而已

永仁二年甲午九月十三日書畢。執筆沙門寛恵

満七十

耽空 在判

雖手振目闔、為結縁所之書也。後見念仏申可訪給。

南無阿弥陀仏 々々

『善導寺本』は「耽空 在判」のところまで絵解きされていたのであろう。ということは、この奥書において鎌倉八幡宮の辺りにおいて、法然の生涯と念仏の教えを絵画化したということを強調していることになる。巻四中陰供養の二七日の段で、法然と八幡・阿弥陀仏とが一体であることを説いていることと密接な関係がある。

関東の人たちはこの法然の絵巻の制作が、鶴岡八幡宮の神意にかなうものだと了解したのではないだろうか。山門に所属する法然の門弟たちが、関東の人たちに、法然の教えを弘める必要上制作したのである。

下巻では、耽空は法然の修学や教化活動が国王のためであり、王法と仏法の興隆のためのものであったということより、法然の流罪や墳墓破却という朝廷や本山延暦寺の行為がいかに不当なものであったかを、関東の人たちに絵画と文章で説明しているのである。それとともに、鎌倉幕府や御家人が念仏信仰を安心して受容できるようにという、布教課題から執筆されたものといえるのである。

耽空の執筆した『伝法絵流通』は、その背景に東山はもろんのこと、大原や嵯峨の地において隆盛していた釈迦・弥陀・善導を一体にした山門の念仏信仰があり、それらをふまえて、またそのような念仏信仰をも「法然の念仏」として包括してしまい、「法然の念仏」こそ慈覚大師の念仏を相承した天台宗（山門）の正統な念仏であることを関東において主張するところに、耽空の編纂意図があったのではないだろうか。このように、耽空の立場から法然の念仏を理解することにより、はじめて耽空の古廟転倒ののりの無饑な思いが理解できるのである。

ところで、親鸞と鎌倉幕府の関係が近年注目されている。峰岸純夫氏は東国の真宗門徒を考察する場合、幕府・得宗権力および在地領主との関係が無視しえないことを指摘され、今井雅晴氏も在地領主の帰依に注目されている。⁽⁶⁶⁾ また神田千里氏は戦国期以前の一向宗について、とかく農民的イメージで考えられがちであった親鸞門流の門徒像が否定されつつあるとして、山伏の活動との共通点を検討されている。⁽⁶⁷⁾

親鸞の滞在した稲田は上述宇都宮氏の支配下にあったことや、親鸞が鎌倉幕府に招かれ一切経の校合をしたとの伝

説には、かなりの信憑性があると指摘されていること。また、坂東本とよばれる『教行信証』は、親鸞のもっとも古い門弟の一人である性信開基とされる下総国豊田荘横曽根恩寺に伝来したものである。親鸞の性信宛の手紙数通が残っているが、性信は鎌倉幕府による建長年間（一二四九～五六）の念仏停止に活躍している。この横曽根門徒は関東御家人のあいだに念仏をすすめており、正応四年（一二九一）性信の弟子性海は北条得宗家の内管領平頼綱の援助により『教行信証』を刊版しているということなどからである。⁶⁹

親鸞の門流においては、聖徳太子絵伝・善光寺如来絵伝・親鸞伝絵など多種多様な絵伝を絵解きしながら念仏が勧進されていたのである。⁷⁰ そのさがけとなるのが、法然上人の伝記である『伝法絵流通』であったといえるのである。親鸞は常陸国稲田を中心に精力的な布教活動を二十年間はたし、文暦元年（一二三四）頃に家族とともに京都に帰り、弟の天台僧尋有の坊に身を寄せている。⁷¹ 仁治二年（一二四一）と寛元四年（一二四六）には聖覚の『唯信鈔』を、寛元四年に隆寛の『自力他力事』を書き写している。また宝治二年（一二四八）には『高僧和讃』を作っているが、そのころというのは、ちょうど門流において「伝法絵」系統の法然の絵巻により念仏の勧進をしていた時期と一致するのではないだろうか。⁷²

正嘉二年（一二五八）十二月高田の願智は、尋有の善法坊において親鸞から自然法爾の法語を聞き書留めている。⁷³ この善法坊で親鸞は弘長二年（一二六二）十一月二十八日往生するが、願智は臨終に立ち合い拾骨している。⁷⁴ その願智が永仁四年（一二九六）書写したのが『高田本』とよばれている『法然上人伝法絵 下巻』なのである。この『高田本』は拙稿で指摘したように、その底本としている初期「伝法絵」とは『国華本』もしくはそれに近い親鸞門流で使用されていた「伝法絵」である。また、『高田本』は親鸞門流の法然の絵巻として制作された『法然聖人絵』（『弘願本』）の詞書の底本として採用されたことも推定できるのである。⁷⁵

親鸞自身の念仏思想と『伝法絵流通』とは直接結びつかないかもしれないが、関東の念仏者に写し送った書物の著

者である聖寛・隆寛、『高僧和讃』と『善導寺本』の共通する点など、関東の親鸞門流の念仏と『伝法絵流通』とは深い関係があるのである。『伝法絵流通』は、絵画だけではなく詞書においても、親鸞門流において重視すべき絵巻なのである。⁽⁶⁾

注

- (1) 拙著『神祇信仰の展開と仏教』（吉川弘文館、一九九〇年）第三部「法然の絵巻と遊女」参照。
- (2) 奥平秀雄「絵巻の特性」（同編日本の美術6『絵巻物』至文堂、一九六六年）。
- (3) 善導寺本『伝法絵流通』の引用は、『本朝祖師伝記絵詞』（善導寺刊、一九二二年）および原本写真による。詞書は井川定慶編『法然上人伝全集』（同全集刊行会、一九五二年。一九六七年増補再版）にも収録されている。また、『法然上人伝の成立史的研究』（知恩院、第一・二・三巻、一九六一〜三年）においては、詞書が『行状絵図』以下の諸本と比較して翻刻されている。各巻全体の写真が『筑後大本山善導寺目録』（九州の寺社シリーズ5）九州歴史資料館、一九八一年）に掲載されていて、『伝法絵流通』の特色がよく理解できるので参照されたい。
- (4) 奥平氏「絵巻の特性」（注2）。
- (5) 『華嚴宗祖師絵伝』（続日本の絵巻八、中央公論社）、武者小路穰「絵巻の歴史」（吉川弘文館、一九九〇年）第六「信仰表明の絵画」。
- (6) 例をあげれば『天狗草紙』園城寺金堂前の三院会合齋議の段には、大衆の論議の言葉が僧侶の作る輪の空白部分一面に書かれているし、世の中を乱すことに成功した天狗たちの宴会の様子を描いた段などは、会話を主体とした絵中の書入れて話が運ばれている。『土蜘蛛草紙・天狗草紙』（続日本の絵巻二六、中央公論社）、原田正俊『天狗草紙』を読む―天狗跳梁の時代―（『歴史を読みなおす（五）大仏と鬼』朝日新聞社、一九九四年）参照。
- (7) 宮崎円遵著作集第七巻『仏教文化史の研究』（永田文昌堂、一九八九年）所収の「中世仏教における絵解について」「聖徳太子伝の唱導と絵解」「真宗伝道史雜想」等参照。
- (8) 林雅彦著『日本の絵解き―資料と研究―』（三弥井書店、一九八二年）。
- (9) 梅津次郎「新出の法然上人伝法絵について」（『国華』七〇五号、一九五〇年。後に同著『絵巻物叢考』中央公論美術出版、一九六八年、収録）。
- (10) 宮崎円遵「法然上人伝の絵解と談義本」（井川定慶博士喜寿記念会編『日本文化と浄土教論攷』、一九七四年。後に著作集第七巻へ注7）収録。
- (11) 拙稿「法然の絵巻と遊女」（注1）参照。

- (12) 小山正文『真宗重宝聚英』第六卷(同朋舎出版、一九八八年)「法然上人絵伝」の総説、同「真宗諸絵伝の成立と展開」(『蓮如上人絵伝の研究』東本願寺出版部、一九九四年)。
- (13) 納富常天『伝法絵略記抄』断簡について(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第五〇号、一九九三年)。「伝法絵略記抄」には「或云」として筆者が他の文献より考証したと思われる箇所があることより、航空の『伝法絵流通』以外にも、法然の伝記が流布していたことが推測できるという。
- (14) 菊地勇次郎『伊豆山の浄蓮房源延』(同補考)(『同著』源空とその門下』法蔵館、一九八五年)。
- (15) 鎌倉幕府の法会とその意義については佐々木馨『中世国家の宗教構造』(吉川弘文館、一九八八年)、平雅行『鎌倉仏教論』(岩波講座『日本通史』第八卷中世二、一九九四年)参照。また幕府の疫病の予防と対策については筆者も検討している。拙稿『疫病と神祇信仰の展開―牛頭天王と蘇民将来の子孫―』(『星の信仰』溪水社、一九九四年)。
- (17) 河上淳『鶴岡八幡宮における供僧の役割』(『駒沢史学』二五号、一九七八年)参照。
- (18) 鶴岡大仁王会については松尾剛次『中世都市鎌倉の風景』(吉川弘文館、一九九四年)参照。
- (19) 高橋秀栄『金沢文庫保管『大仏旨趣』について』(『金沢文庫研究』二七一号、一九八三年)。
- (20) 上横手雅敬『鎌倉大仏の造立』(『龍谷史壇』九九・一〇〇合併号、一九九二年)。
- (21) 新日本古典文学大系『中世日記紀行集』一五二ページ。
- (22) 『鎌倉遺文』五四八四号文書。「然則一天之下四海之中、算諸人之数、勘一文之銭、四十五億八万九千六百五十九枚也、民力無費、我願可成、所祈者東土利益之本尊也、已預東土助成之下知、所念者、西方極樂之教主也、蓋遂西方勸進之中懷、僅聚五銖之一銭、令造立八丈之大仏」「經管伽藍、是非小愚僧之微力、漸仰大菩薩之冥助、人無煩民無愁」。
- (23) 久木幸男『航空絵詞の嘉禎三年説を疑う』(『印度学仏教学研究紀要』第八卷一号、一九五七年)、田村円澄『法然上人伝の研究』(法蔵館、一九七二年。後に同著作集別巻として刊行、法蔵館、一九八三年)。
- (24) 『定本親鸞聖人全集』第五卷、一八七ページ。
- (25) 中井真孝『法然伝と浄土宗史の研究』(『思文閣出版、一九九四年)第一篇第二章『源空聖人私日記』の成立について。
- (26) 高木豊氏は『鎌倉仏教における国土の意識』(『鎌倉仏教史研究』岩波書店、一九八二年、収録)において、法然・親鸞・一遍・栄西・道元・日蓮の三国の呼称を紹介され、ことに日蓮における日本の国土意識について考察されている。
- (27) 勝浦令子『女の信心―妻が出家した時代―』(平凡社選

書、一九九五年）一七四～一八三ページ。

- (28) 『撰集抄』卷九「大江貞（定）基事」（桜楓社、一九八五年）には「年老いたる母ぞいまそかりける。我もろこしに渡りぬときかば、老のなみに歎きしづみて、命もあやぶかるべし。いかげせむと思ひ煩ひながら、母の前にまうでていとまをこふに、母のいふやう、『恩愛別離の悲しみは、いかでかたへてしのぶべき。されば、仏も、物の悲しき事には、悲母の一子を思ふ事にとへ給へれば、我いかなげきの心なからむ。しかはあれども、求法伝受の志をば、などが悦ばさらん。それこそ釈子の甲斐に侍らめ』と聞えける」とみえる。『伝法絵流通』と親近していて、『伝法絵流通』制作にあたっての説話集からの引用を考えうるうえで、その関係が注目される。

- (29) 『三千院円融藏文書目録』（三千院門跡円融房出版部、一九八四年）、日本歴史地名大系「京都市の地名」「勝林院」の項目。

- (30) 西口順子「院政期における別所浄土教の考察―良忍上人伝をめぐる―」（『史窓』第一五号、一九五九年）。

- (31) 佐藤哲英著『叡山浄土教の研究』（百華苑、一九七九年）三三ページ以下。

- (32) 菊地氏「黒谷別所と法然」（注14）。

- (33) 『善導寺本』第二十二「大原談義の図」における席次。

◇頭真の側から ①明遍②頭真③智海④静厳⑤覚什⑥証真⑦堯禅 横に①静然②仙基③貞慶

法然上人『伝法絵流通』と関東

◇法然の側から ①法然②重源③印西④湛敷⑤念仏房⑥蓮契⑦藏人入道

- (34) 「天台円教菩薩戒相承師資血脉譜」「珍養の広血脉」。伝教大師より伝戒の慈覚大師の円頓戒は、以後安慧・慧亮・長意の三流に分れた。長意の系統は慈念・慈忍・源心・禅仁・良忍と伝承され、良忍以後、叡空の黒谷流と、葉忍の大原流と、嚴賢の大念仏流とに分派した。恵谷隆戒著『改定円頓菩薩戒概論』（大東出版社、一九七八年）参照。

- (35) 新日本古典文学大系『平家物語 下』三九八～九ページ。渡辺貞麿氏は湛敷・印西を「融通念仏すゝむる聖」であったとし、『平家物語』にみえる建礼門院の念仏も融通念仏の立場が反映されたものとされる。同著『平家物語の思想』（法蔵館、一九八九年）第二部第二節「建礼門院の信仰と融通念仏」。大原談義は叡空の『伝法絵流通』において始めて登場する話である。本論で指摘するように、『伝法絵流通』の構成から考えても、『伝法絵流通』の制作者が創作した話だと推定できる。なお、法然伝における大原談義の展開については別稿を準備している。

- (36) 善導の五部九巻の著書とは『観無量寿経疏』四巻・『法事讃』二巻・『観念法門』一卷・『往生礼讃』一卷・『般舟讃』一卷のことである。法然在世時代には『般舟讃』が流布せず「八帖書」であった。『般舟讃』は建保五年（一二一七）に仁和寺の経蔵から発見され、貞応元年（一二三二）に開版されている。「五部九巻」としては証空や親鸞

- の門流においても流布している。高橋正隆「善導大師遺文の書誌研究」(藤堂恭俊編『善導大師研究』山喜房仏書林、一九八〇年)、平松令三「親鸞自筆外題善導五部九卷加點本」(同著『親鸞真蹟の研究』法藏館、一九八八年)参照。
- (37) 福井康順氏は法然義の影響化に成立した証空の西山義における信仰だとされる。福井氏、『灌頂卷』の仏教史的性格」(『干潟龍祥博士古稀記念論文集』、一九六四年。後に著作集第六巻『日本中世思想研究』、一九八八年、収録)。胎内文書については、青木淳「西山証空における造像の研究(一)」(『西山学会年報』第二号、一九九二年)に詳しい報告がある。
- (38) 中西随功「道覚法親王雜考」(『西山学報』第三五号、一九八七年)。
- (39) 裏辻憲道「増上寺本法然上人絵伝考」(『増上寺本法然上人絵伝詞書』(『美術研究』第六一号、一九三七年)。裏辻氏は「増上寺本」を『善導寺本』『拾遺古徳伝』と比較検討され、「増上寺本」の成立は正安三年(一一三〇)から元亨三年(一一三三)の間と推定されている。
- (40) 「増上寺本」の席次。
 ◇頭真の側 ①頭真②智海③静敵④証真⑤明遍⑥静然
 ◇法然の側 ①法然②重源③印西④湛教^(マ)⑤念仏房⑥蓮契
 ⑦藏人入道⑧無名
- (41) 五味文彦著『院政期社会の研究』(山川出版社、一九八四年)三七六ページ。
- (42) 石田尚豊「重源の阿弥陀名号」(『大和文化研究』第六巻八号、一九六一年。後に同著『日本美術史論集』中央公論美術出版、一九八八年、収録)。
- (43) 「南無阿弥陀仏作善集」(奈良国立文化財研究所研究史料「第一冊」。重源の作善については「仏教芸術」第一〇五号(一九七六年)「特集・俊乗房重源と美術」が詳しい。
- (44) 堀池春峰「重源上人と南大門仁王像」(『南都仏教』第六五号、一九九一年)。後白河院政期の寺院政策については田中英英『平氏政権の研究』(思文閣出版、一九九四年)、東大寺大仏再建の意義については和平社会の実現という視点からの大石雅章「寺院と中世社会」(岩波講座『日本通史』第八巻中世二、同年)、久野修義「東大寺大仏の再建と公武権力」(『古代・中世の政治と文化』思文閣出版、同年)、小原仁「文治元年の後白河院政」(『日本古代の祭祀と仏教』吉川弘文館、一九九五年)が注目される。
- (45) 石田尚豊氏は、重源の宗教的性格をつらぬくのは真言密教であり、重源が法然を包容する可能性は存在しえても、当時の法然の側からはその逆は考えたいことを、すでに昭和三十四年に「法然と重源」(『日本仏教』四、一九五九年。後に注42収録)において指摘されている。別所における不断念仏・迎講の意義については、西田円我「俊乗房重源の東大寺再建について」(『佛教大学研究紀要』第五四号、一九七〇年。後に『重源・観尊・忍性』吉川弘文

館、一九八三年、再録）参照。

(46) 田村円澄『法然上人伝の研究』（注23）二三四ページ。

(47) 『玉葉』建久三年三月十五日条。古代学協会編『後白河院』（吉川弘文館、一九九三年）所収の五味文彦「後白河院の実像」、および角田文衛「後白河院の近臣」参照。

(48) 『三長記』元久三年二月二十二日条・建永元年六月二十一日条。

(49) 『鎌倉遺文』二二一五号・三二三四号文書。平雅行『日本中世の社会と仏教』（塙書房、一九九二年）。

(50) 『九卷伝』巻二「さて其の次に天台十戒を解説し給ふ」。

我山は大乗戒、此寺は小乗戒との給ひければ、大衆存の外の気色どもなりけれども、当寺の古老の中に、兼日に靈夢しめす事ありけり。件の次第、さき立て披露しければ、衆徒各口を閉て別の事なかりけり」。

(51) 中野正明著『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館、一九九四年）第二部第二章「七箇条制誠」。

(52) 拙著『神祇信仰の展開と仏教』第一部「専修念仏と神祇」（注1）。『広疑瑞決集』については伊藤唯真『浄土宗の成立と展開』（吉川弘文館、一九八一年）第五章第三節の「中世武士の撫民と信瑞の治政論」、「神本地之事」については北西弘「一向一揆の研究」（春秋社、一九八一年）第一篇「真宗の布教と門徒の信仰」をあわせて参照されたい。

(53) 高木豊『鎌倉仏教の歴史過程』（同編）論集日本仏教史

〈四〉鎌倉時代、雄山閣、一九八八年）。

(54) 「興福寺奏状」の九箇条の失をあげておく。第一「新宗を立つる失」、第二「新像を図る失」、第三「釈尊を軽んずる失」、第四「万善を妨げる失」、第五「靈神に背く失」、第六「浄土に暗き失」、第七「念仏を誤る失」、第八「釈衆を損ずる失」、第九「国土を乱る失」である。原文は日本思想大系『鎌倉旧仏教』参照。

(55) 『善導寺本』では、

慈覚大師念仏伝灯ハ経文を引て宝池の波に和し、空也上人念仏ハ音をたてゝ徳をハしらす。恵心僧都の要集にハ二つの道をつくりて一心のものハまよひ、永観律師の往生講式ニハ七門をひらきて一篇にハつかす。とある。『国華本』『高田本』『琳阿本』『古徳伝』はほぼ同文で継承するが、『九卷伝』『行状絵図』では、聖覚が慈覚大師の念仏は劣機のものには受入れがたいものだと述べたとする。『行状絵図』を紹介しておく。

慈覚大師の念仏伝灯は経文を引きて宝池の波に和すれども、劣機の行にあたはす。諸師所立の念仏三昧は仏境を縁して心地の塵をばらへども、下根のつとめにあたはす。恵心僧都の要集には三道をつくりて一心のものはまよひぬへし。永観律師十因には十門をひらきて一篇にはつかす。

となっている。聖覚の唱導をとおしても、法然の念仏を慈覚大師の念仏の継承と説明している就空の立場（山門の

「念仏門」がよく理解できる。その一方で、『九卷伝』『行状絵図』からは、山門からの法然の念仏の独立、鎮西教団（浄土宗）の成立をうかがうことができる。聖寛の山門における立場については、平氏「嘉祿の法難と安居院聖寛」（注49）参照。

- (56) 『国華本』兼日に往生の告を蒙る人びと「前権右大弁藤原兼隆中宮大進云朝臣／権律師／隆寛」長榮寺律師是也／白河准后宮女房／故別当入道惟方孫／不知実名／鎌倉念阿弥陀仏／坂東尼／東山一（切）経谷住僧大進公／三條小川倍（陪）從信賢／祇陀林寺経師／四條京極薄師子太郎正家／或真清歟。西山ノ水ノ尾峯壳炭老翁荷薪樵夫紫雲簪見之。

- (57) 『統本朝往生伝』以下の八幡大菩薩と釈迦・弥陀の本地垂迹説の成立と展開については、拙著（注1）第二部「大明神号の成立と展開」参照。

- (58) 『新訂源平盛衰記』第二卷（新人物往来社）、六九ページ。

- (59) 『知恩講私記』については、櫛田良洪氏が東寺宝菩提院より安貞二年（一二二八）の奥書のある古写本を発見され、隆寛作と推定された。『知恩講私記』には真宗に伝来した室町時代の写本があり、『真宗聖教全書』五「拾遺部」に収録されている。本稿では、知恩講は親鸞の門流で展開した講会であることを指摘しておきたい。『知恩講私記』は一種の法然の伝記であるが、北野天神縁起と天神講

式、聖徳太子伝記と太子講式との関係よりしても、すでに先行する法然の伝記の存在を前提として制作されたものと考えられる。宇高良哲氏は、『九卷伝』と近い関係にある隆寛作『法然上人伝』（後人の書写本、『隆寛本』）を紹介され、隆寛が『知恩講私記』を作ったと考えるならば、隆寛が法然上人伝を制作していても不自然なことではないと指摘された。筆者は、航空が法然の伝記を執筆できたのは、隆寛没後であるからでかたと思っている。ただこの『隆寛本』と『知恩講私記』とはかなりのへだたりがあり、後人の増補部分を想定しても、『知恩講私記』の前提としての制作と考えるのは無理なようである。よって、現在のところ、筆者は、親鸞の門流において「伝法絵」系統の法然の伝記が展開していること、『知恩講私記』と『善導寺本』との近い関係、また親鸞の『和讃』も「伝法絵」系統の法然の伝記を要約した可能性がある、といったことより、『知恩講私記』は「伝法絵流通」における法然の生涯を要約したものであるとの見方をすてきれない。櫛田氏「新発見の法然伝記」『知恩講私記』一（『日本歴史』第二〇〇号、一九六五年）、宇高氏「新出の隆寛作『法然上人伝』について」（『大正大学研究紀要』第六九輯、一九八四年）参照。

- (60) 日本歴史地名大系「京都市の地名」「清涼寺」の項目、細川涼一「中世律宗寺院と民衆」（吉川弘文館、一九八七年）第五「法金剛院導御の宗教活動」、「壬生寺展」図録

(京都文化博物館、一九九三年)。

- (61) 伊藤唯真『聖仏教史の研究 上』(著作集一、法蔵館、一九九五年)第五編第一章「法然伝に現われた聖覺像」、および中野正明著『法然遺文の基礎的研究』(注51)参照。

- (62) 真辻憲道「善導大師像の一考察」(『仏教芸術』第六号、一九五〇年)、同「法然上人と重源上人」(『仏教文化研究』第一〇号、一九六一年)。

- (63) 伊藤唯真『聖仏教史の研究 上』(注61)第四編第四章「貴族と能声の念仏聖——平戸記」にみる——。

- (64) 中野正明著『法然遺文の基礎的研究』(注51)、四五三ページ。

- (65) 卷一序文では「正月廿五日」とする。納富氏が指摘されるように「正」と「五」は草書体では類似するので、いずれかが誤写であろう。納富氏前掲論文(注13)。

- (66) 峰岸純夫「鎌倉時代東国の真宗門徒——真仏報恩板碑を中心に——」(北西弘先生還暦記念会編『中世仏教と真宗』吉川弘文館、一九八五年)。

- (67) 今井雅晴「親鸞と関東教団」(『真宗重宝聚英』第四巻、同朋舎出版、一九八八年)、同「平頼綱とその周辺の信仰」(『仏教史学研究』第三四巻二号、一九九一年)。

- (68) 神田千里「原始一向宗の実像」(中世の風景を読む第四巻『日本海交通の展開』新人物往来社、一九九五年)。

- (69) 『教行信証』の開版については、平松令三『真宗史論

攷』(同朋舎出版、一九八八年)第二部第三章「高田宝庫より発見せられた新資料の一、二について」も参照。南北朝期になると関東の親鸞直弟である性信や真仏の系譜に属する人たち、すなわち愚咄や了源門下の念仏者が近江湖東地方や大和地方において活躍するが、彼らはいずれも関東武士である。彼らにおいては法然を高祖とし、その弟子親鸞からの法脈が強調されるのであり、親鸞の血をひく本願寺歴代との師弟関係が強調されることがなかった。今堀執筆の『五個荘町史』第一巻第七章第一節「湖東の一向宗」参照。

- (70) 「聖徳太子絵伝」「善光寺如来絵伝」「親鸞聖人伝絵」による布教活動については、『真宗重宝聚英』第三巻・五巻・七巻参照。

- (71) 光森正士「親鸞聖人の遷化をめぐる」(平松令三先生古稀記念会編『日本の宗教と文化』同朋舎出版、一九八九年)。光森氏によれば、日光輪王寺所蔵の『常行堂声明譜』(貞和五年へ一三四五)書写によると、山門の念仏が久安元年(一一四五)には移植されていた。尋有は叡山東塔の常行堂の検校であったが、建長七年(一二五五)ころ輪王寺常行堂の上番預阿闍梨を勤めて善法寺に不在であったため、親鸞が寄宿することができたのではと推測されている。当時の輪王寺常行堂の上番預阿闍梨に源恵がいるが、彼は輪王寺第二十六世座主となり、正応五年(一二九二)には天台座主となっていて、上番預阿闍梨はかなり高位に

位置する役職であったとみられるとのことである。

- (72) 『定本親鸞聖人全集』第二巻和讃篇・第三巻和文篇・第六巻写伝篇参照。

- (73) 高田専修寺藏願智筆『獲得名号自然法爾御書』。

- (74) 『本願寺史』第一巻(浄土真宗本願寺派宗務所、一九六一年)第二章(一〇)「遷化と葬送」参照。

- (75) 拙稿「法然の絵巻と遊女」(注1)。

- (76) 林淳氏は、日本の宗教史を東アジアの枠組で見直すならば、親鸞の「普遍」思想よりも近世の葬祭仏教の方が、東アジアの宗教史のレベルにおいていっそう普遍的であるという見解はまだまだ少数意見に過ぎないと述べておられる。法然や親鸞の念仏も生活の中の信心であり供養であったのであるから、伝記に登場する彼らに帰依した人たちの

念仏をさげすむことはできないのである。その展開で仏教の国内化を論じてこなかったことより、中世仏教の近世への展開、すなわち日本人が受容した仏教を研究者が見失う破目になったのではないだろうか。林氏「日本仏教の位置——比較宗教史の構想——」(『日本の仏教』2、法蔵館、一九九五年)。

〔付記〕 一九九五年六月十五日の佛敎大学総合研究所「宗教と政治」研究班定例研究会において、草稿を發表した。そのさい多くの助言を賜ることができたが、本稿に十分に生かすことができなかった。その点は今後の課題として取り組みたい。感謝申し上げる次第である。